大道上遺跡

1977・3

小布施町教育委員会

大道上遺跡正誤表

頁	行	誤	正
目次六	5	P6	P7
七	13	P14	P16
七	15	P26	P27
七	22～27	P42～P47	P43～P48
十二	下2	年	月
十七	16	南側へく	南側へ行く
十七	19	用	田
二十一	1	とたころ	たところ
二十一	3	こはぶし	はこぶし
二十八	3	す。	す。
四十	下4	と形	と甑形
四十	下8	な	ら
四十	下8	悪	恵
四十六	第4図	屈	居

大 道 上 遺 跡

長野県上高井郡小布施町大道上遺跡発掘調査報告書

1977・3

小布施町教育委員会

序

最近、各種公共事業の推進にあたり、自然環境の保全、文化財の保護が大きな社会問題としてクローズアップされてきております。

建設省では環境アセスメントの重要性を強く打出し、事業計画の策定にあたり、多面的な検討を加えるよう指導しており、経済優先の名の下に開発を急ぎ、自然を無視したり、遠い祖先の残した歴史を無視することは許されなくなってきた事は当然とはいえ、時代の大きな進歩だと思います。

たまたま当管内の道路改良事業・県道中野小布施線上高井郡小布施町松村工区において、計画の段階において埋蔵文化財大道上遺跡がある事が判明し、小布施町教育委員会の御指導により、工事着工前に発掘調査を行い、記録保存することになりました。

調査は須坂園芸高校教諭関孝一氏の直接指導により、関係者の手により慎重に行われたわけですが、特に高校生グループ等若い世代の参加により、適切な御指導のもとに、この地域の遺跡発掘調査が行われ、古代の生活構造が発掘された事は、郷土に対する新しい愛情を育てる実地教育の機会でもあり、大変意義深いことと思います。

このような調査は開発計画の増大していく中では、なかなか適当な調査者が得られず、事業促進の隘路になっている面もあると聞いておりますが、本調査は幸い立派な指導者を得て正確な調査と資料保存が出来て、工事も順調に進められる運びとなりました事は、本当に感謝に堪えない次第であります。

この報告書とともに、各種発掘資料が小布施町民俗資料館に永久に保存されて、今後の研究の役に立つならば、大変幸甚であります。本調査に御努力いただいた小布施町教育委員会をはじめ、関孝一氏等関係者に対して深甚の敬意を表し、序といたします。

昭和51年10月30日

長野県須坂建設事務所長

太　田　勝　巳

例　　言

1. 本書は昭和51年度国庫補助道路改良工事（県道中野・小布施線）事業にともなう、小布施町大道上遺跡の発掘調査記録である。
2. 本調査は小布施町教育委員会が長野県須坂建設事務所より委託されて、昭和51年４月末から昭和51年６月末にかけて実施したものである。
3. 発掘調査及び遺物整理は関孝一が責任者となり、郷道哲章・金井文司・井上光由・小林裕・須坂園芸高校社会科クラブ員・小布施中学校生徒・小布施町郷土史会々員が主となって行なった。銘記して厚く感謝の意を表す次第である。
4. 出土遺物・調査記録は小布施町民俗資料館で保管している。
5. 遺物の実測と図版作製は郷道が、写真と遺構等の図版作製は関が担当した。
6. 本書の執筆にあたっては、出土遺物の項目は郷道が、その他の項目は関が分担した。
7. 本書の編集は金井と関が行なった。

目　　次

序……長野県須坂建設事務所長　太田勝巳…… 3
例　　言…… 5
目　　次…… 6
挿図目次…… 6
図版目次…… 7
Ⅰ　はじめに…… 9
1.　調査に至るまでの経過…… 9
2.　調査団の編成…… 9
3.　発掘調査の経過（調査日誌抄）……10
Ⅱ　遺　　跡……13
1.　遺跡の立地と環境……13
2.　遺跡の状態……14
Ⅲ　遺　　構……18
1.　土　　壙……18
2.　第Ⅰ地区溝……18
3.　住　居　址……19
4.　集　石　址……20
5.　第Ⅲ地区溝……22
6.　石組遺構……22
Ⅳ　遺　　物……24
1.　P_1号土壙出土遺物……24
2.　P_2号土壙出土遺物……24
3.　第Ⅰ地区溝出土遺物……24
4.　住居址出土遺物……25
5.　集石址出土遺物……28
6.　石組遺構出土遺物……29
7.　第Ⅲ地区溝出土遺物……29
8.　遺構以外のグリット出土遺物……30
Ⅴ　結　　語……40

挿 図 目 次

第１図　小布施扇状地と土師遺跡推定分布範囲……13
第２図　遺跡付近地図……14
第３図　発掘地籍の全体測量図……16
第４図　グリットにみられる土層例……17
第５図　土壙実測図……18
第６図　第Ⅰ地区溝実測図……19
第７図　住居址実測図……20
第８図　集石址実測図……21
第９図　第Ⅲ地区溝実測図……22
第10図　石組遺構実測図……23
第11図　土壙出土遺物実測図……24
第12図　第Ⅰ地区溝出土遺物実測図……25
第13図　住居址出土遺物実測図（その１）……26
第14図　住居址出土遺物実測図（その２）……26
第15図　住居址出土遺物実測図（その３）……28
第16図　集石址及び石組遺構出土遺物実測図……29
第17図　第Ⅲ地区溝出土遺物実測図……30
第18図　遺構以外のグリット出土遺物実測図（その１）……31
第19図　遺構以外のグリット出土遺物実測図（その２）……32

図 版 目 次

第１図版　大道上遺跡全景……42
第２図版　調査スナップ・土壙……43
第３図版　第Ⅰ地区溝・第Ⅰ地区溝内土器出土状態……44
第４図版　住居址・住居址かまど……45
第５図版　集石址・第Ⅲ地区溝……46
第６図版　石組遺構・石組遺構土器出土状態……47

Ⅰ　はじめに

1．調査に至るまでの経過

善光寺平の東北縁にあたる中野市と須坂市の間に、この数年来、いわゆる広域農道の建設が着工され、各所において進行している。両市の中間に位置する小布施町も、広域農道の通過予定地になっており、路線にかかる用地買収や測量はかなり以前から行なわれてきたらしい。もともと、広域農道はこの地域における農産物の流通促進をはかる目的で計画されたと聞くが、正式には国庫補助道路改良工事事業とよばれているそうである。

この道路施工にともない、埋蔵文化財遺跡の破壊も当然懸念されていた。幸い須坂市では全壊に近い古墳1基のみ、中野市では皆無であり、該当する遺跡にそれほど問題が残らないが、小布施町の場合、道路が小布施扇状地を縦断する恰好になり、その半分は遺跡地にかかることになるのである。この中で特に、建設省の事業分担となる小布施町松村地籍は急を要していた。昭和50年に、遺跡地を除く工事があらかた完成しており、残る所は昭和51年度着工の予定とされていたからである。須坂建設事務所によって進められている工区であるが、これにかかるのが大道上遺跡である。

大道上遺跡は後述のとうり、小布施扇状地の末端に形成された古代集落遺跡の一部分に相当すると考えられる。しかし、地形的には扇端からやや離れ、扇央に近い所にあるため、いわば集落範囲の南限に立地しているとみてさしつかえないであろう。そのためか、今までの分布調査では確認される機会がなかった。

ところが、たまたま路線予定地の東隣において土師器が一括出土し、路線上にも破片の散布がみられることから、小布施の古代集落遺跡の範囲が予想以上のひろがりをもつことがわかったのである。そのため、小布施町教育委員会は急拠、県文化課の指導を得て、発掘調査に基づく記録保存の方針をたてるに至った。昭和51年4月10日、大道上遺跡の発掘調査について、町文化財調査委員や郷土史の会などの関係者による打合わせ会がもたれ、調査日程や調査団の編成などが検討された。

2．調査団の編成

調査会責任者　　高見本治郎

事務局

荒井　登　堀込綱利、飯沼正治、金井文司、清水正克、宮沢正一

調査団

調査団長　　関　孝一

調査員

市川慶太郎、岩崎小弥太、丸山正志、込山　薫、池田富男、小林　裕、井上光由、小林謙三、郷道哲章

調査補助員

富田　武、小林房男、藤田国良、山上茂治、横山圭二、矢島広美、小松軍治、田中茂実、小山哲雄、吉池寿一、小林正重、小林秀子、長谷部貞夫、田中三子、加藤　忠、吉家武造、宮川重光、倉石和彦、藤沢　一、米沢啓史、丸山公祥、板倉　進、斎藤武雄、岩崎美兼、小林悦男、牧恵治、小林まさみ、中条忠市、荒井よしえ、小林百枝、呉羽吉太郎、富岡良夫、吉江英夫、小島博士、渡辺　勉、市川　勉、原昇太郎、青木恒夫、林　秀純、岩本博行、岩井一郎、荒井宏、伊藤千和子、田中弘子

調査協力者

小布施中学校生徒23名、栗ガ丘小学校生徒15名

（以上、氏名順不同・敬称略）

3. 発掘調査の経過（調査日誌抄）

4月25日（日）

道路施工予定地の雑草を焼払い、発掘地を整備する。2m平方のグリットを設定し、発掘範囲を、旧の地割と微地形にもとずいて、第Ⅰ地区から第Ⅲ地区まで大きく分けた。

第Ⅰ地区は用水路の西側部分、第Ⅱ地区はその反対側、第Ⅲ地区は第Ⅱ地区の南側部分である。第Ⅱ地区と第Ⅲ地区の境には地形の段落があり、扇央寄りの第Ⅲ地区の方が一段高くなっている。

発掘はまず第Ⅰ地区と第Ⅱ地区より開始された。発掘したグリットの状態は、いずれも表土下40～50cmで黄色の砂礫層に達する。遺物包含層が浅いためか、攪乱の著しいグリットが多かった。出土遺物は土師器の小破片がわずかに検出されただけで、遺構らしいものは発見されなかった。

4月29日（木）

昨日掘り残したグリットの調査を継続するとともに、本日の作業は主として第Ⅱ地区のグリットに重点をおいて発掘した。全般に遺物の出土状態は散発的で、土師器片が多い。包含層の状態も昨日と同じであるが、中には自然面による落込み状態もうかがわれた。昨日から掘りすすめてきた地点は松川の旧乱流路にあたる所と思われ、現在の用水路はそれを利用して作ったものではないかと推定される。

5月2日（日）

第Ⅰ地区のグリットで溝遺構の一部が確認されたため、第Ⅱ地区の発掘はしばらくとどめ、第Ⅰ地区に集中した。溝遺構の西隣にも土壙の一部が確認されたので、両方の発掘にとりくむことになった。

5月3日（月）

第Ⅰ地区では溝と土壙の発掘に終始した。溝は南北に巾広く通り、溝内より土師器が集中的に出土した。土壙はいくつかのピット状土壙をあわせもつものらしいが、溝とは時期が異なるようである。

第Ⅱ地区では南側半分の地点から、土師器片の出土量が多くなりはじめ、用水路寄りのグリットでは集石遺構が発見された。こぶし大ぐらいの石を不規則に集めたもので、多量の土師器片が伴出している。他のグリットでは遺物包含層中にあまり礫石が含まれないことを考えると、この集石が自然状態のものとは思われない。

5月4日（火）

第Ⅰ地区の溝と土壙を発掘地区内ぎりぎりの範囲まで拡張し、掘り終る。

第Ⅱ地区では昨日確認された集石遺構を中心に、グリットをひろげていったが、やはり礫石の散乱状態が検出され、出土遺物もかなり多い。遺物はいずれも土師器片で、一括できるものはなく、性格の把握に苦慮する。しかし、このような礫石の散乱状態はこの地点だけで、包含層の土壌も黒色を呈している。

夕刻になって、第Ⅲ地区との境に近いグリットで、住居址の床面と思われる部分を確認した。

5月5日（水）

昨日確認した住居址の発掘に集中的にとりかかる。竪穴住居は砂礫層を掘り込んでおり、落込み線が方形に露呈しはじめた。しかし、その一部は道路敷外にはみだすため、完掘するにはどうしても拡張が必要である。夕刻、地主と交渉し了解を得る。

5月9日（日）

住居址の拡張部を掘り下げ、午後から床面にそって竪穴の壁を出しはじめた。砂礫層を掘込んでいる壁はなかなかつかみにくい。竪穴住居内の南側から土師器がまとまって検出された。住居址に伴なうものかどうか一考を要すと思われる。

5月16日（日）

調査分担を住居址と第Ⅲ地区とに分けて行なう。

住居址の方は床面と壁をほぼ出し、かまどの調査が主となった。なお、かまどをとりまくように、住居址内に列石が検出された。住居内における間仕切の遺構なのであろうか。

第Ⅲ地区では、発掘したグリット数にしては遺構や遺物の出土状態が明確でなく、所によっては消毒用敷設パイプがあったりして、相当攪乱されていた。表土及び遺物包含層は北側で約1.5mもあり、扇央部寄りの南側へいくにしたがって浅くなる。北側の厚さは扇状地の傾斜を平坦にするため、盛られたものであろう。ここでも土師器は小破片が目立つ。

5月22日（土）

調査参加者が少なく、作業能率は低かった。残る第Ⅲ地区の発掘に主力をおいたが、その中央地点で、巾が狭く長い溝遺構が検出された。第Ⅰ地区の溝と異なり、浅く黄色粘土層に掘込まれてい

た。消毒用敷設パイプの跡かとも思われたが、内耳土器が一括発見されていて、必ずしもそれとは断定できかねる状態であった。

5月29日（土）

調査参加者が少ないため、測量及びセクション記録に重点をおく。発掘は第Ⅲ地区の南側グリットを残すのみである。午後になって石組遺構が検出された。第Ⅱ地区の集石と異なり、人頭大の石を楕円形に組んでいる。伴出遺物は極めて少ない。

5月30日（日）

石組遺構の発掘を継続した。石を除去した後の下部遺構はなかった。なお、他のグリットでは特に遺構らしいものも発見されなかった。夕刻、器材等の後片付を行ない、発掘調査を完了する。なお、埋戻しは6月5日に、ブルドーザーで行なってもらった。

以上、主として休日を使っての変則的な発掘調査であったが、調査メンバーの構成上、やむをえない日程であった。そのため、調査参加者は日によって異なり、多い時は小中学生を含めて100名近い人数になり、少ない時は10名ぐらいの人数になった時もあった。極めて悪条件の下での発掘調査になってしまったが、平均30名位の実働で、発掘調査日数は11日間を要している。

発掘後の遺物整理は6年5日～6月7日、及び6月27日・7月4日の5日間・旧須坂高校小布施分校の教室を使って、須坂園芸高校社会科クラブ員がこれにあたってくれた。

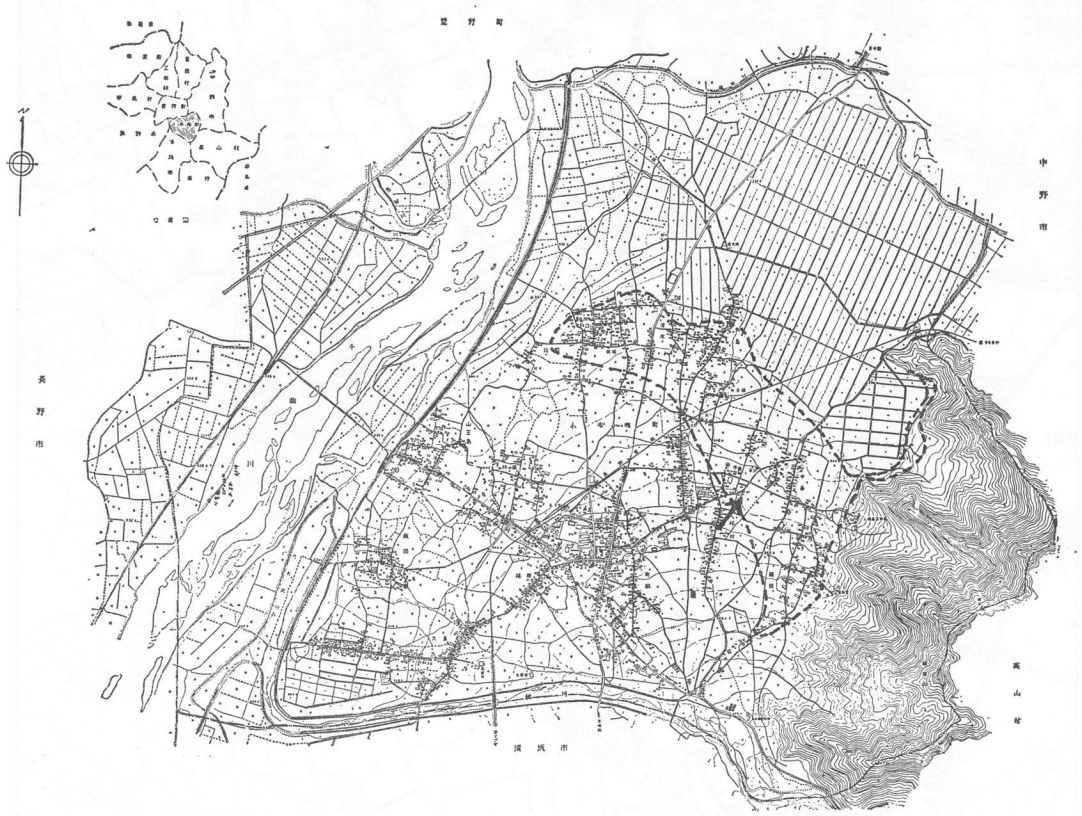
Ⅱ 遺　　跡

1. 遺跡の立地と環境（第1図・第2図）

遺跡の所在する小布施町は善光寺平の東縁、いわゆる河東地域にひらけた松川扇状地の右扇にあたる。この右扇は別に小布施扇状地ともよばれ、半径約3㎞、扇頂の標高400m、扇端は332mある。松川扇状地の左扇は須坂市の通称日滝原である。

扇状地を形成した松川は上信越県境に源をもち、西流して千曲川に合流する。荒れ川として知られ、福島正則の治水事業などが行なわれた結果、現在の流路に固定したらしい。それ以前の松川は、旧河床でうかがう限り、上松川付近から松の実団地、さらに松村、六川と町組の間、清水と押羽・羽場の間に自然流路となって流れていたという。旧松川が今よりも小布施側に片寄って流れていたことは、小布施の遺跡立地に深い関係があったと思われる。

もちろん、旧松川の流路は一筋の固定された川ではなかった。扇状地上に幾度かの氾濫を重ね、



第1図　小布施扇状地と土師遺跡推定分布範囲（→印大道上遺跡所在地）

第2図　遺跡付近地図（▬ 発掘地籍）　　1：10.000

いくつかの乱流路を形成していたことは、小布施の用水路網の状態から十分推察されるのである。小布施の用水路には、界堰・通り堰・矢島堰・六川堰・北岡・押羽堰・山王島堰・大島・飯田堰があり、扇頂部の上松川で取水して放射状に流れている。この用水路網は人工的につくられたものであるが、施工にあたっては旧乱流路の地形面を最大限利用したであろうと考えられる。このような扇状地上における乱流路の存在は、扇状地における遺跡を考える上で、注意しなければならない点である。

さらに、松川はわが国有数の酸川（すがわ）（PH 4）で、飲用水に適さない特殊性をもっている。かつて、扇形に流れる用水堰に多くの水車がかけられ、硫化鉄を多く含むため、水車の耐用年数が長かったといわれるくらいである。松川がいつ頃から酸川になったのかわからないが、その原因は上流における硫黄の自然溶解にあり、おそらく、上信越県境の火山形成時からその流出は盛んであったと思われる。このこともまた、小布施の遺跡立地に大きく関係していたといえる。

もともと、小布施における遺跡のあり方は、東方に連なる雁田山麓や延徳田圃沿いの扇端部に集中していて、松川及び千曲川沿いには極めて少ない。この原因は、松川や千曲川の氾濫が激しかったこともあるが、松川の場合は酸性水で飲用に適さなかったことも大きな理由になっていると思われる。

ひるがえって雁田山麓は、松川の氾濫を受けにくく、飲用に適す湧水に恵まれていることから、すでに旧石器時代あるいは縄文時代にまでさかのぼって遺跡が存在している。小布施史の発祥地といわれるゆえんであるが、稲作農耕の発達に伴ない、狭い山麓地から北にひろがる扇端部への進出がみられ、古代土師遺跡の繁栄期をむかえるのである。この稲作集落形成の背景をなすのが、現在延徳田圃とよばれる広大な低湿地である。千曲川の後背湿地であるが、小布施扇状地との汀線に雁田沖・六川沖などとよばれる弯入があり、扇状地からの押出しによる泥質土が堆積していて、稲作に極めて好適な条件をつくりだしていた。その点、氾濫のくりかえす砂質土の千曲川沿いは、稲作の不適な所であって、遺跡が少ないのもそうした立地条件の相違によるものと考えられるのである。

事実、この高井地方の古代土師遺跡は、ほとんどが延徳田圃をとりまいて分布している。小布施では扇端部に半月状に立地し、更に飯綱前遺跡や中野市桜沢遺跡のように、汀線を中心に山麓に立地するもの、あるいは中野扇状地における小田中・西条・岩舟の各遺跡など、草間丘陵では特に安源寺遺跡が知られ、いずれも延徳後背湿地を背景に成立した遺跡である。

ところで、大道上遺跡は先にもふれたが、小布施扇状地における土師遺跡の分布からみれば、南のはずれにあたる。かつての松川の自然流路に近く、延徳田圃から離れ、遺跡の立地条件としてはそれほど良好とはいえない。扇端の遺跡が発展を続け、周辺に拡大した現象と考えられるが、今回の調査では必ずしも新しい時期の遺物だけに限られていない。弥生時代から土師の時代にかけて急速に拡大した結果とみるべきであろうか。大道上遺跡が小布施の土師集落調査にとって恰好な位置にあるわけである。

なお、小布施の古墳は、中子塚、古堂塚などの土盛墳はこの土師遺跡の分布範囲にあり、終末期

の積石塚は雁田山麓に群集している。集落と古墳との関係、集落と稲作農耕地との関係、集落と松川乱流路との関係、あるいは集落と土壙墓との関係など、小布施の古代集落に関する立地条件は一概に言及できない要素を含んでいるものと思われる。

2. 遺跡の状態（第3図・第4図）

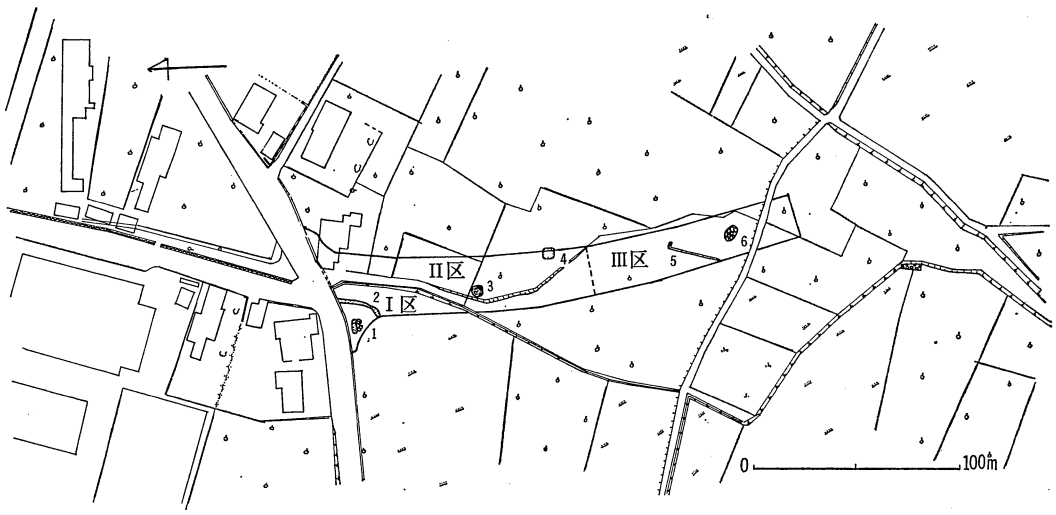
大道上遺跡の発掘予定地は、南北約220m、東西巾約20mの道路施工予定地である。この範囲内に2m平方のグリットを290設定し、第Ⅰ地区・第Ⅱ地区・第Ⅲ地区に大きく区分した。発掘は南側の第Ⅰ地区と第Ⅱ地区より着手したが、まず遺物の出土範囲がほぼ把握されたといえる。

第Ⅰ地区においては、西側の溝及び土壙内からの出土遺物に限られ、用水路寄りでは皆無の状態であった。遺物の出土範囲は更に西側にひろがると思われるが、用水路沿いのグリットでは、遺物包含層の黒色土が浅く、直ちに黄色の砂礫層に達する。

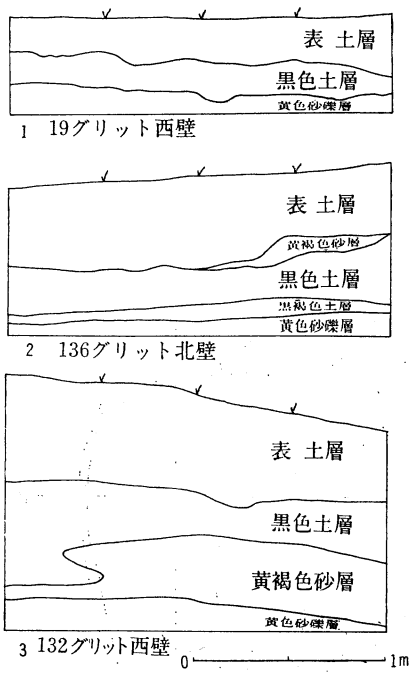
この砂礫層は小布施扇状地の形成期における堆積であり、用水路沿いが厚い堆積をしめしているのは旧松川乱流路の名残りと考えられるのである。もちろん、用水路施工当時の人為的な破壊をうけている部分も認められたが、それほど広い範囲にわたるものではない。

それは第Ⅱ地区においてもいえる。第Ⅱ地区は第Ⅲ地区との間にある地形の段落を境に、低い方にあたるが、集石址（第3図3）と住居址（同図4）がこの段落線に沿って立地し、出土遺物も顕著であるのに対し、第Ⅰ地区の東側、すなわち第Ⅱ地区の南側にあたるグリットでは1・2片の土師器が出土したものの、遺物の出土状態は極めて散発的であった。

土層は第Ⅰ地区の用水路沿いほど明確な堆積はないが、やはり黒色土が浅く、すぐに礫層に達し、その下部に黄色の砂礫層がでてくる。なお、黄色とはいえ、松川の第2硫化鉄も含み、褐色を呈す部分もある。



第3図　発掘地籍の全体測量図（1. 土壙　2.5. 溝　3. 集石址　4. 住居址　6. 石組遺構）



第4図 グリットにみられる土層の例

結局、第Ⅱ地区の北側部分はどの範囲まで続くのかわからないが、相当広範囲にわたり、扇状地上を北側へむかって乱流していたのではないかと思われる。少なくとも、第Ⅱ地区内ではこれといった遺物の出土状態は認められず、もし、このような所が旧乱流路跡とされるなら、第Ⅰ地区における溝及び土壙や、第Ⅱ地区における集石址及び住居址などは、扇状地における乱流路に最も接近した遺構であったといえよう。

第Ⅲ地区は第Ⅱ地区の南側、段落上にあたる。発掘地点では最も扇央部に近い所であり、畑耕作による土層の攪乱も最も著しい。特に北側の第Ⅱ地区との境にあたる部分は表土層が厚く、畑地を平坦にするために盛った形跡がある。しかし、遺物包含層も厚く、土師器片が多量に出土していることは、発掘地域内ではこの辺が最も生活適地であったと考えられそうである。

第Ⅲ地区は南側へくにしたがい、遺物の出土量も漸減するが、かわって内耳土器片が目立つ。中世における内耳土器の調査例が少ない今日、注目される点であろう。なお、土師器の伴なう遺構として、石組遺構が南側で発見されたが、遺物の出土範囲は大体この辺で途切れるようである。ここから北方の延徳用圃（千曲川後背湿地）に接する汀線まで、直線にして約700mある。この距離が小布施の扇端に営なまれた古代集落の南北におけるおおよその巾と考えられる。ところで、大道上遺跡における土層はそれほど複雑な状態をしめしていない。沖積平野にみられる土層は氾濫のくりかえしにより、複雑な堆積状態をしめすのが普通であるが、この遺跡にみられる一般的な土層状態は、第4図1のセクションが代表的である。黒褐色の表土層に続いて黒色土層があり、黄色砂礫層に達する。黒色土層はいわゆる遺物包含層にあたり、厚さは大体20cmから30cmが普通である。

それに対し、第4図2・3は黄色砂礫層と異なった黄褐色砂層とでもいう間層のあるセクションである。それが黒色土層の上にある場合と下に堆積する場合とがあり、この土層からは遺物は出土していない。あまり礫を含まず、細かな砂粒が多く、硫化鉄によって褐色がかっている。主として第Ⅲ地区の土層にみられ、第Ⅱ地区でも南側の第Ⅲ地区に接する部分に存在する。

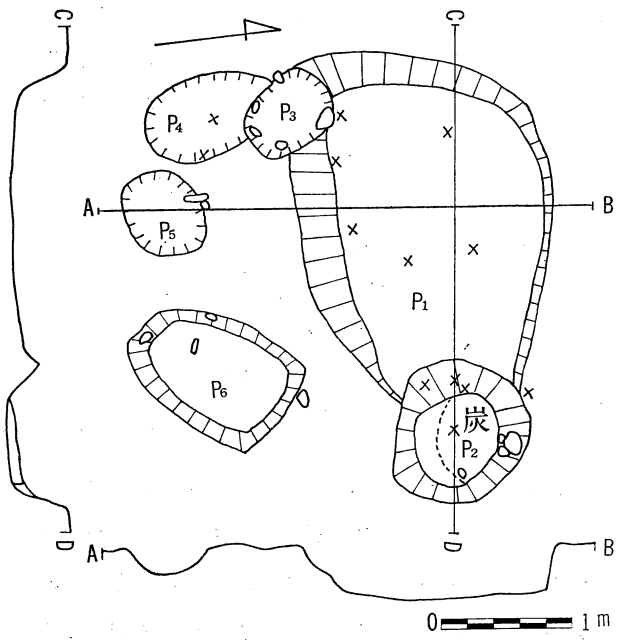
むろん、この間層は黄色砂礫層の形成後に松川の氾濫によって2次堆積した層と考えられるのであるが、遺構以外のグリットから出土した土師器片がいずれも細かく、散乱状態であるのは、あるいはこうした松川の氾濫で流された結果と考えられよう。

なお、遺物は内耳土器を除いては、層位的に分れず、地点別に新旧の時期差がうかがわれる。遺構はいずれも黄色砂礫層直上あるいは数センチ上の黒色土層で築いている。

Ⅲ 遺　　構

1. 土　壙（第5図）

第Ⅰ地区西端のグリットで発見された遺構である。黄色砂礫層を掘込んでおり、計6個の土壙が検出された。そのうち、第5図P_1の土壙が中心的存在で、南北約2m、東西約2.5mの規模を有す。砂礫層のため土壙壁が崩れ、不定形のようにみえるが、原形は方形であったと思われる。出土遺物は床面に甕・高台付皿の土師器や灰釉陶器片などが出土している。



第5図　土壙実測図

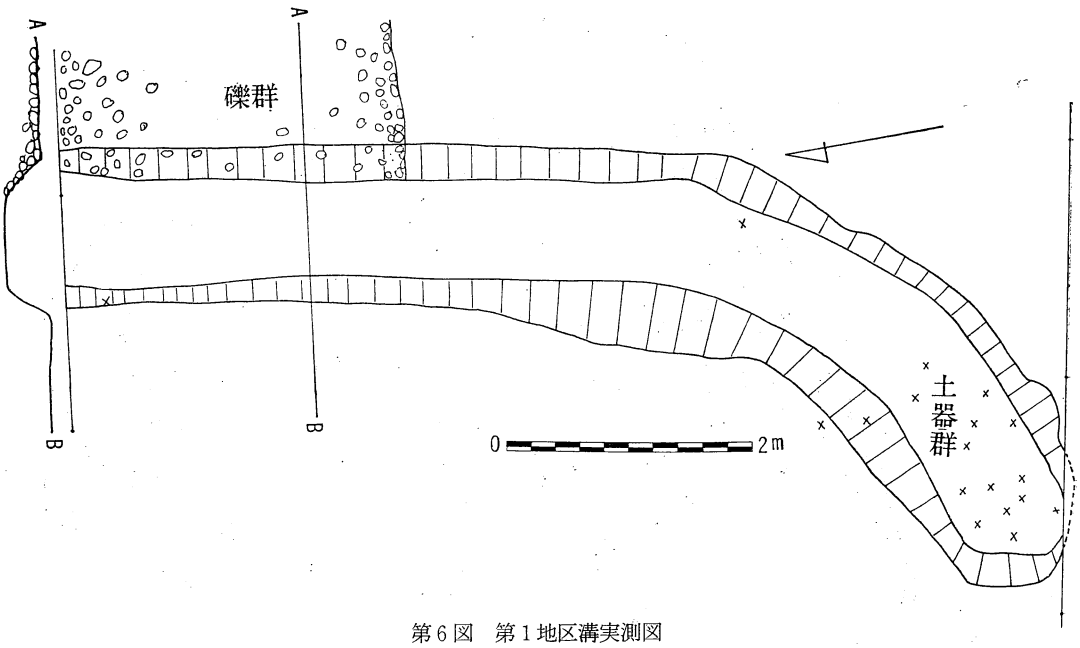
このP_1土壙を切ってP_2とP_3のピット状土壙がある。P_3の方は切りこみが浅く、出土遺物はない。むしろP_2の方がP_1に付随する内容を含んでいる。巾1mの円形をなし、土壙内から多量の木炭が検出され、完型に近い須恵器坏が伴出している。P_1出土の遺物と時期的には同じであり、P_2は独立した土壙というより、P_1土壙の付属施設的な性格が強いように思われる。

P_4・P_5・P_6の土壙はP_1土壙に近接し、何らかの機能を有していたであろうが、P_3と同じく掘りが浅く、出土遺物もP_4でわずかに検出された他は認められなかった。

2. 第Ⅰ地区溝（第6図）

溝の巾は約1.4m、床面の巾は約80cmあり、黄色砂礫層を掘込んでいる。しかし、この砂礫層は通常の状態と異なり、黄色い川砂が多く、北側の東壁に至っては礫群が対照的に区分されたようにあらわれる。

溝は南北に等高線と直交し、現在の用水路とほぼ同じ方向に通じている。北側へ行くにしたがい溝は深くなるが、南側は彎曲して浅くなり、やがて行き止まる。溝底の床面は平担である。



第6図　第1地区溝実測図

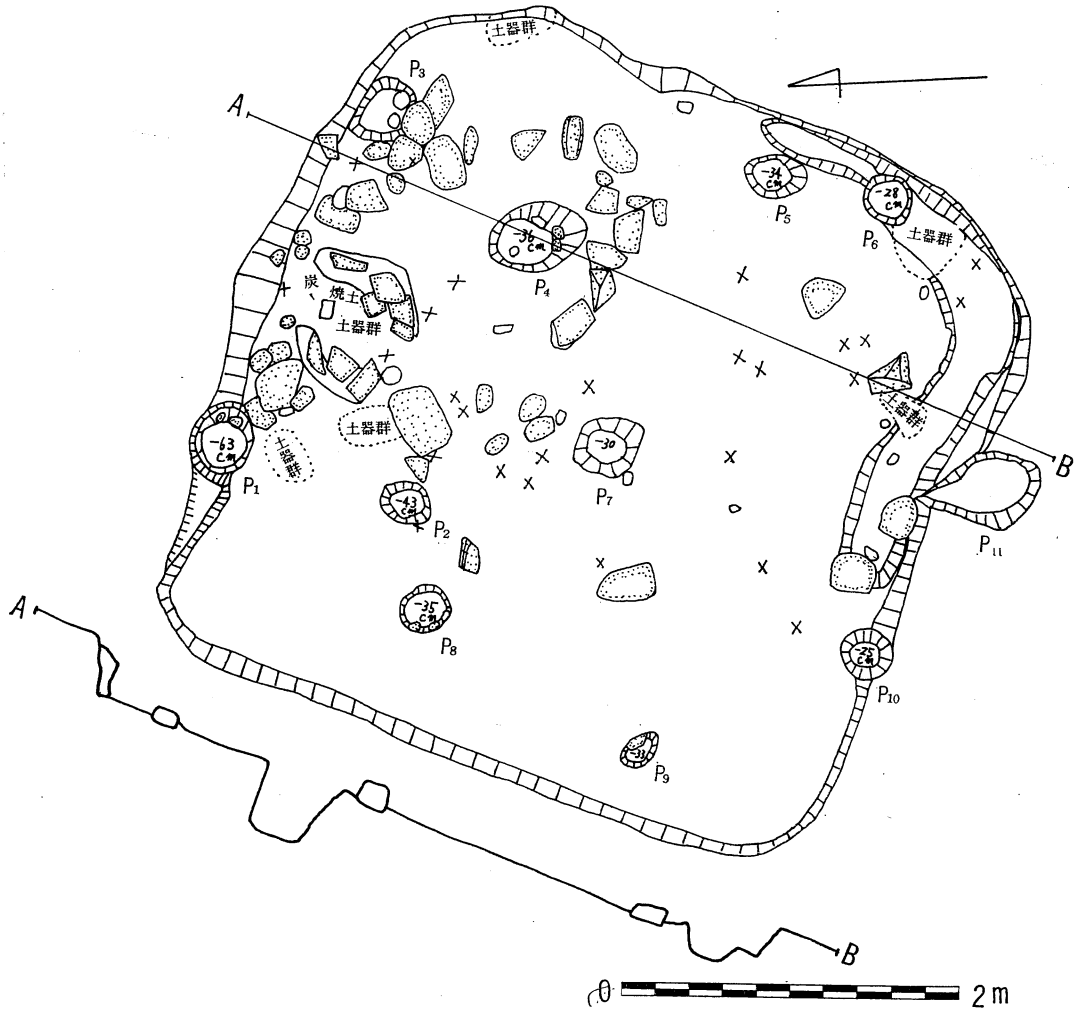
遺物は溝の彎曲部あたりから南側の先端にかけて集中している。いずれも土師器の破片で、甕形が多いように観察された。これらが溝内へ投げすてられたように重なっていたが、北側には完型の坩が1個出土しただけであった。出土遺物の時期は比較的古い頃に比定され、前述の近くにある土壙の時期とは異なっている。

3.　住居址（第7図）

この調査で発見されたただ1つの住居址である。遺跡が住居の立地に適していないのか、あるいは後世の自然的な破壊によるものなのかわからないが、いずれにしてもこの他には住居の断片的な形跡さえうかがえるものはなかった。発掘中、別のグリットにおいて、自然の落込みや柱穴ではないかと疑ったピットなど、いくつかの場面に出会ったが、いずれも遺構として把握されるに至らなかった。

ところで、この住居址の規模は、約4.4m平方の正方形で、黄色砂礫層を掘り込んでいる。その掘込みの壁は約30cmある。北東壁にむかってかまどが築かれているが、石組に粘土をはってつくったもので、巾約40cm、奥行約80cm、高さは住居壁高と同じで、かまどとしては大きな部類に入るであろう。かまど内は床面よりやや掘りくぼめ、焼土約10cm、木炭が約15cmの厚さで堆積していた。かまど中央より壁寄りに、大きめの支柱がおかれ、土師器甕類が押しつぶされて一括検出された。約5個体分はある。

また、この住居で特に注目しなければならないことは、かまどをとりまくようにめぐらされた列石である。40cmぐらいの河原石や偏平な安山岩などを使っているが、あたかも屋内に厨房のような



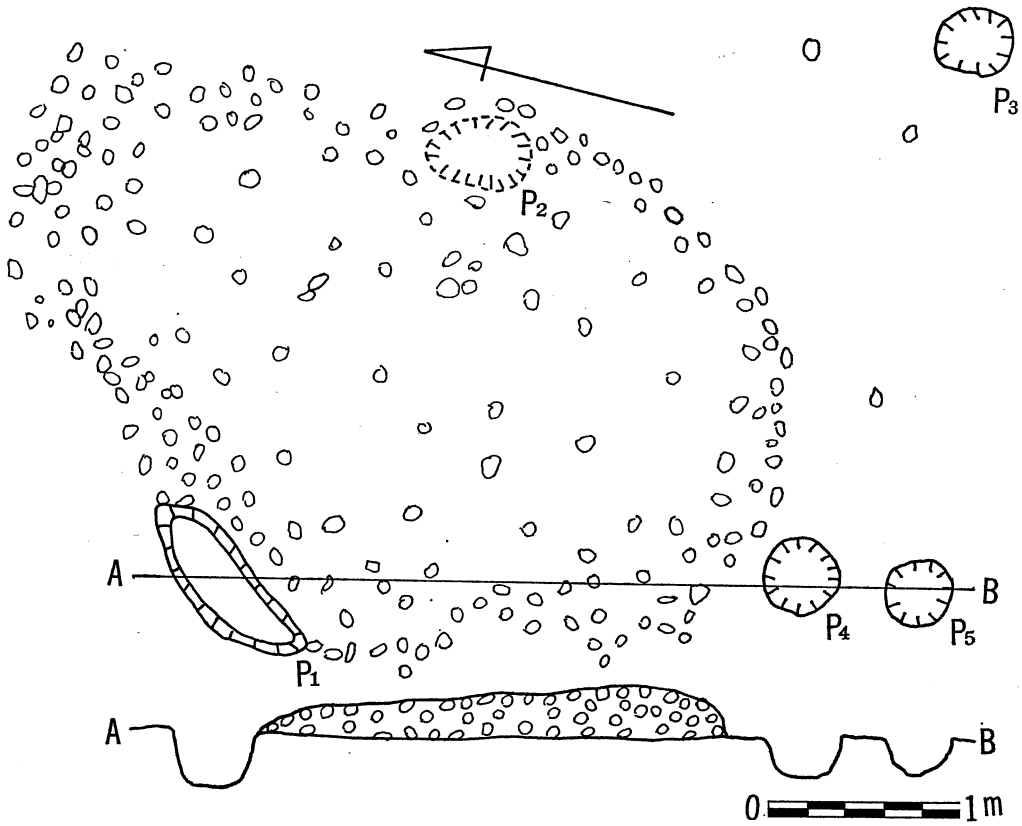
第7図　住居址実測図

施設を区画しているのである。遺物もこの配列された石のかまど側に多出している。しかもそれに加えて、第7図P_1～P_4の柱穴はこの区画部分を支えるように配置しているのである。

柱穴とされるものはこの他にP_5～P_{11}まであるが、これらはP_1～P_4の柱穴とは対照配置をとっていない。むしろ、住居南西部側の上屋を支える配置である。こちら側では南側コーナーにある溝を中心に土器群が集中して検出された。ただ、これらの土器群はかまど周辺のものとやや出土状態が異なり、溝上の一部に焼土や木炭のブロックがあったりして、2次的に残された形跡が考えられるのである。両方の遺物に時期的な差はなく、大体平安時代頃に相当させて考えられる。

4.　集石址（第8図）

当初グリットの発掘で、第8図P_3～P_5のピットが検出されたため、住居址の一部ではないかと思われた。遺物は土師器の破片に限られるが、出土量はかなり多く、さらに北側へ掘りすすめていっ



第8図　集石址実測図

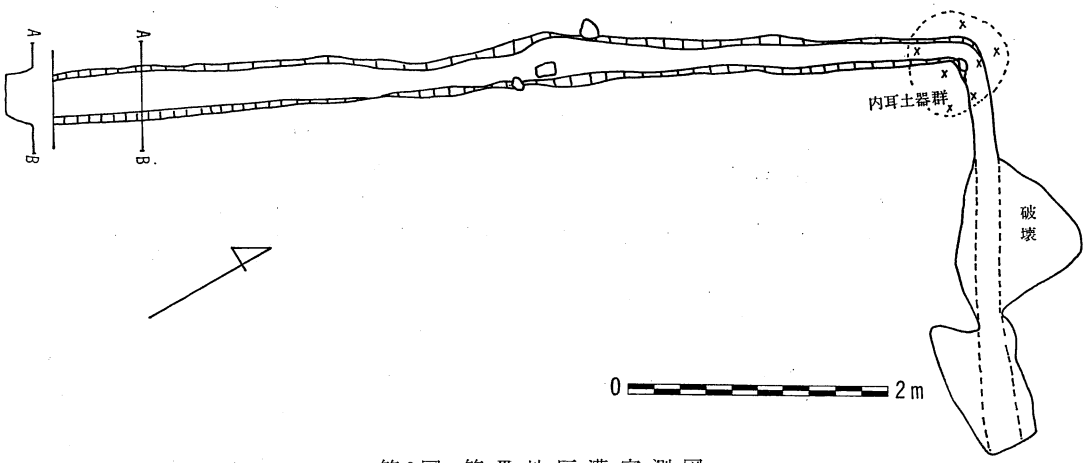
とたころ、この集石址にあたったのである。この集石は黄色砂礫層の直上に卵形に築かれ、4m×3mの規模をもつ。断面の厚さは20～30cmあって、マウンド状を呈し、この部分だけ礫が多い。礫こはぶし大ぐらいの比較的小さなもので、黒色土と混在している。黒色土にはしばしば炭が認められ、他の黒色土より黒っぽい。

他のグリットでも黒色土中に礫が混在している所はあるが、これほど密ではないし、土師器片の出土も多くない。明らかに人為的な遺構であると思われる。さらに、この集石に伴なうものと思われるP_1・P_2のピットも確認された。約30cmぐらいの深さで、P_3～P_5のピットもあるいは関連があったのかもしれない。

極めて特殊な遺構であり、ピットを伴なうこのような集石の性格は判断に苦しむ。出土遺物もすべて土師器片で、遺構を象徴づけるような特色はうかがわれない。なお、集石をとりのぞいた下部には何の遺構も存在していなかった。時期は大体第Ⅰ地区溝と同じ頃に比定させて考えられる。

5. 第Ⅲ地区溝（第9図）

第Ⅲ地区で検出されたこの溝は、深さ20㎝、巾20～40㎝あり長く続いている。溝底は平らで直線的に北東―南西の方向向に走り、北東隅で屈曲している。第Ⅲ地区の表土層下にある黄褐色砂層を切りこんでいて、初めは果樹園の消毒用パイプの配管あとかと思われた。事実、表土層は攪乱されて不安定であり、東西に走る溝はコーナーの部分を除いてほとんど破壊されていた。



第9図　第Ⅲ地区溝実測図

土層からみれば、この溝がある黄褐色砂層の下に黒色土層があり、土師器の包含層にあたっているわけで、上層にあたるこの部分からの土師器片の出土は極めて少ない。むしろ溝のコーナーにあたる所から一括出土した内耳土器を重視すべきであろう。

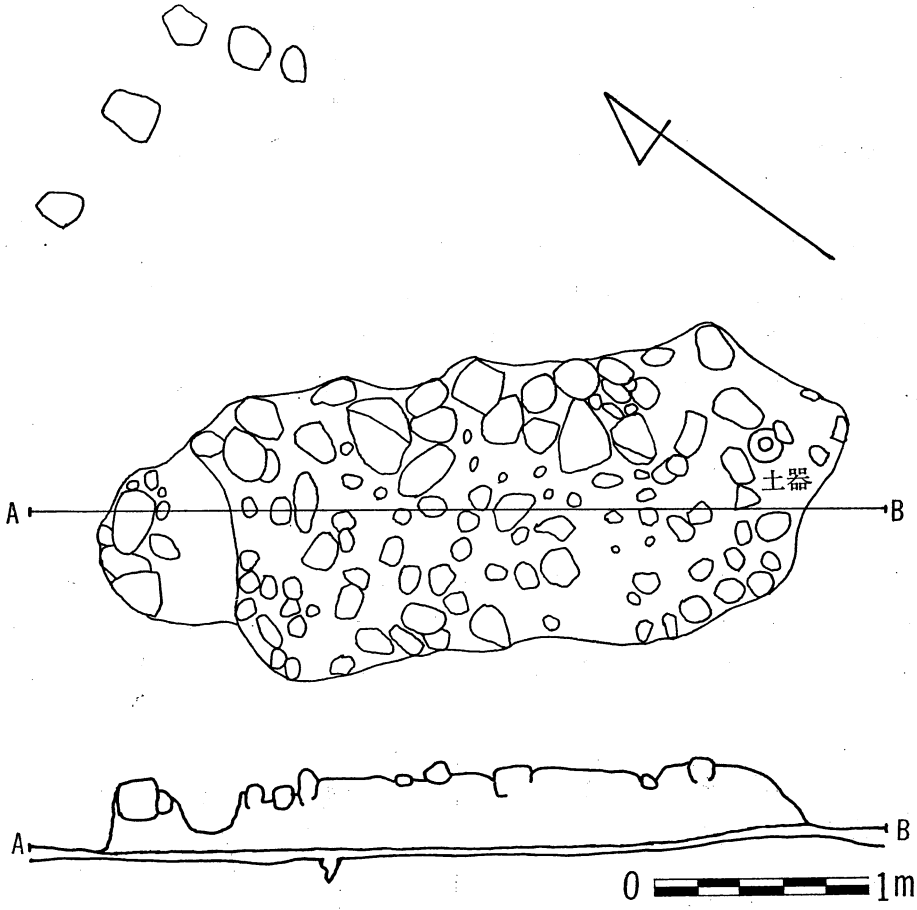
この内耳土器は中世陶器とともに溝内の中ほどから出土したもので、出土範囲は限定されている。しかし、溝は地層的にも一致し、中世の所産と考えてさしつかえないであろう。なお、溝に付随する遺構は何も認められなかった。

6. 石組遺構（第10図）

第Ⅲ地区の南端に発見された遺構で、北西―南東の方向に、3.6m×1.2mの規模をもった楕円形の積石である。断面の厚さは約40㎝あり、マウンド状を呈する。

第Ⅱ地区の集石址と異なる点は、人頭大の比較的大きな石が使われ、黒色土層の上に築かれていることである。周辺に多少同じような石が散乱していたが、ほとんど砂地で、この石組だけがきわだっている。さらに出土遺物も少なく、南西側に二重口縁土器が一個体、石組の間に正位におかれていた。ピットのようなものも伴なっていないが、石組を除去した下部に、一つだけ小さなピットが検出された。時期は集石址や第Ⅰ地区溝と同じ頃に比定されるが、この石組遺構は少なくとも実

用的な生活址とは考えにくいものである。



第10図　石 組 遺 構 実 測 図

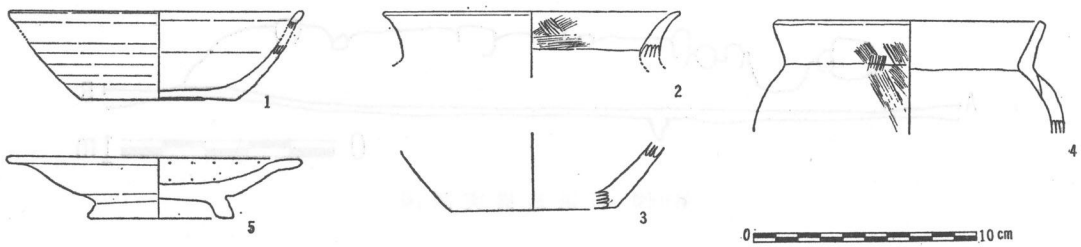
Ⅳ 遺　　物

1. P_1号土壙出土遺物（第11図２～５）

甕と高台付の皿が出土している。高台付の皿（５）は内黒土器でほぼ完型であり、土壙床面より出土している。出土位置は２ヶ所に分散し、一方の破片は割れた後に何らかの変化を受けており、内面の黒色が橙褐色に変化している。技法的にはロクロ整形の後、高台をつけ、口縁部から体部にかけてヘラミガキを施す。この土器の特徴から、時期は平安時代と推定される。

2. P_2号土壙出土遺物（第11図１）

覆土中層よりほぼ完型の須恵器坏が出土している。粘土塊をロクロ回転で一気に引きあげ、底部を糸切している。体部外面は顕著な水引き痕を有す。この須恵器坏の特徴としては、底部付近の体部を回転ヘラケズリ整形していることである。なお、焼成は非常に脆い。平安時代と推定される。

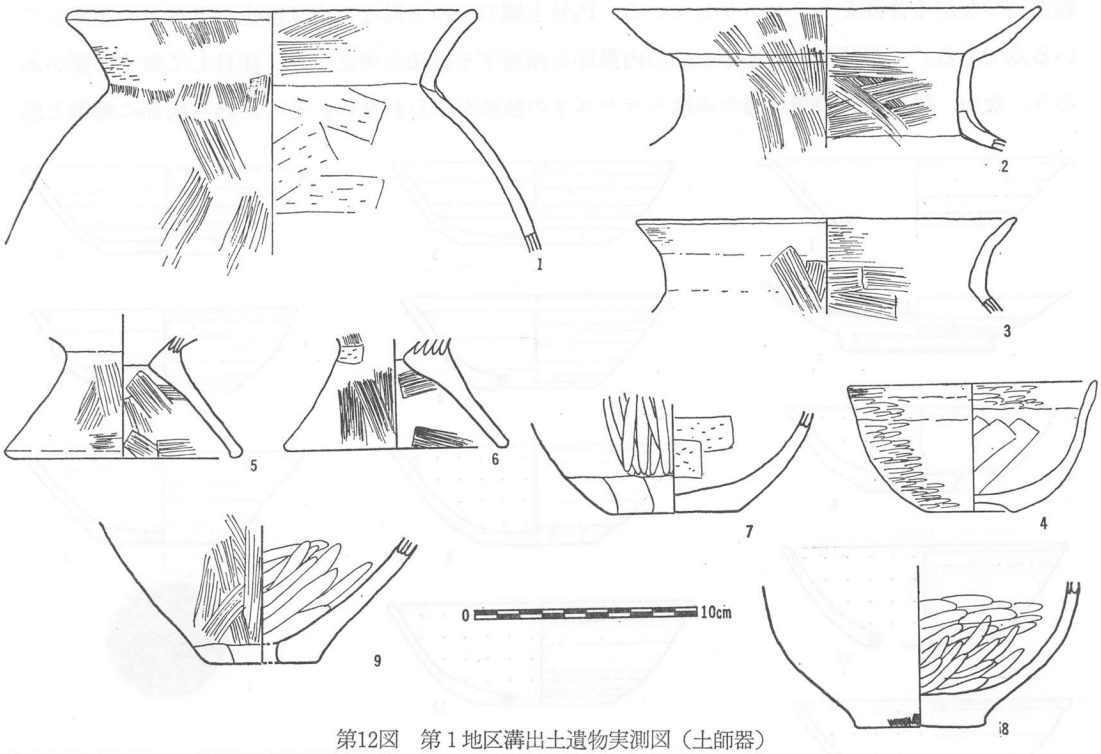


第11図　土壙出土遺物実測図（2～5・P_1号土壙出土土師器，1・P_2号土壙出土須恵器）

3. 第Ⅰ地区溝出土遺物（第12図）

甕形土器・壺形土器・坩形土器・甑形土器が出土しており、出土量は比較的多い。しかし、完型土器は坩形土器（３）のみである。この坩形土器を除いては、土師器の出土地点は南側に集中している。

甕形土器（１・３・５～８）は脚のつくものとつかないものがあると思われる。口縁部は外反し、体部は球胴形をなし、最大径は体部中位にあると推定される。技法的には、輪づみの後、口縁部はササラ状工具で整形し、（またはササラ状工具で整形しないで）ヨコナデ整形を施す。頸部から体部脚部にかけては、ササラ状工具、またはヘラ状工具で整形を施す。脚部下位はヨコナデ整形をしている。



第12図　第１地区溝出土遺物実測図（土師器）

壺形土器（２）は二重口縁を有する。口縁上段は内弯し、下段は直立する。技法的には甕形土器と同様である。

坩形土器（４）は口縁部の内面と外面、及び体部外面にヘラミガキを施し、体部内面はヘラナデで整形している。底部は上げ底のようにえぐられている。

甑形土器（９）は底部のみであるが、直線的に外方へひろがる器形をとる。技法的には甕形土器と同様と思われる。孔は１つであり、穿った後、ていねいにナデ仕上げをしている。

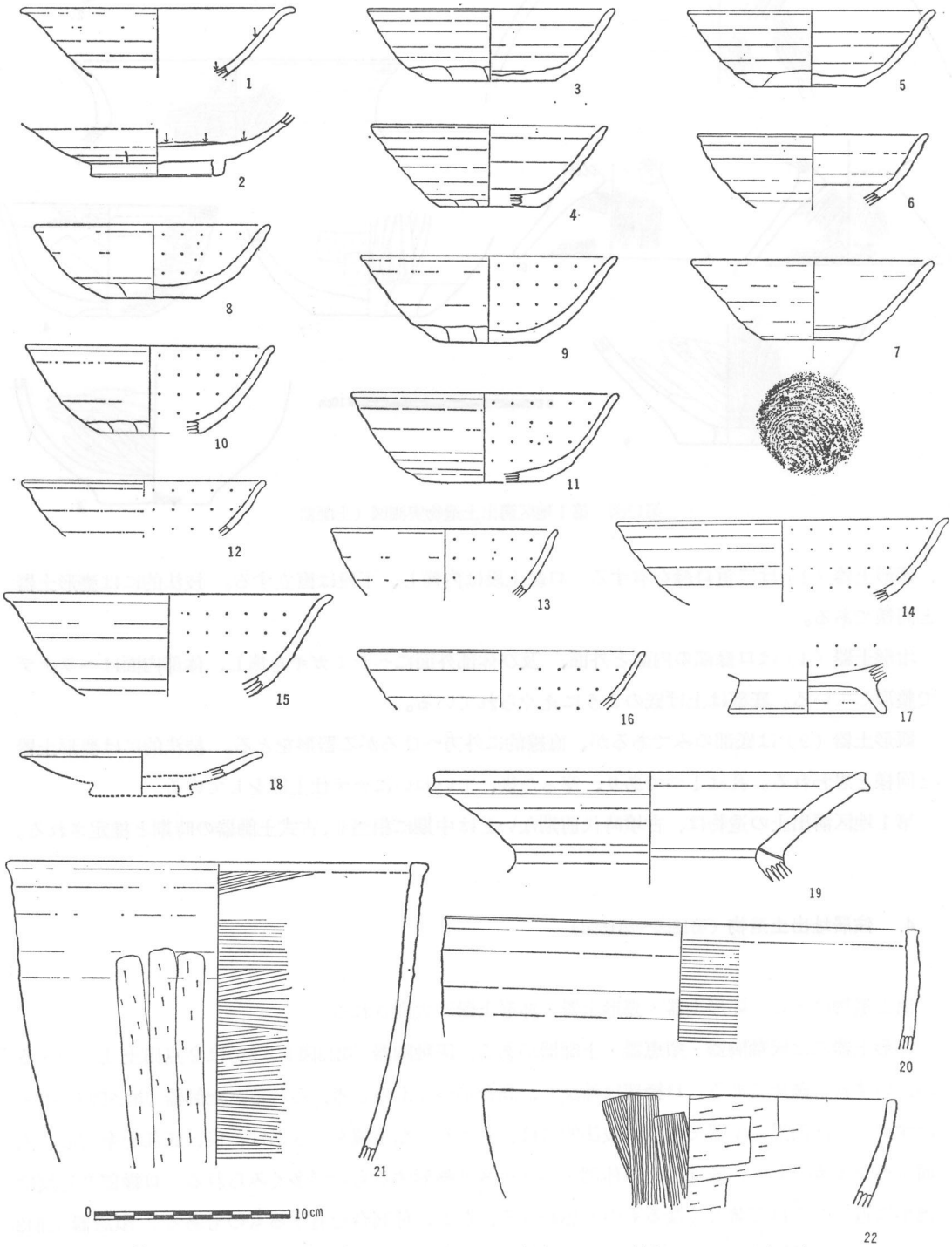
第１地区溝出土の遺物は、古墳時代前期ないしは中期に相当し、古式土師器の時期と推定される。

4.　住居址出土遺物（第13図～第15図）

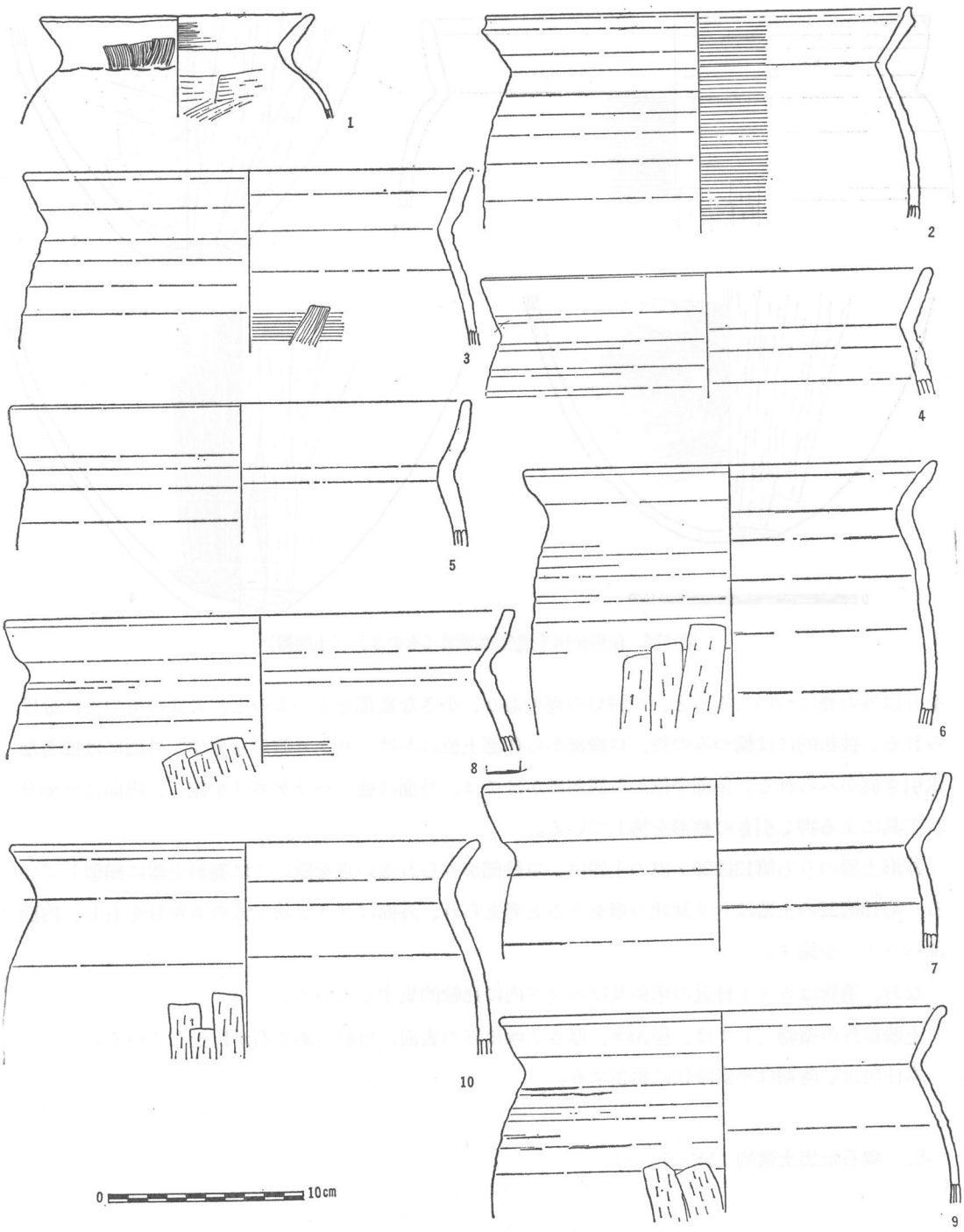
出土遺物は多い。坏形土器・甕形土器・鉢形土器に大別される。

坏形土器には灰釉陶器・須恵器・土師器がある。灰釉陶器（第13図１・２）は２点出土しているが、いずれも破片である。口縁部は外反し、高台がつくものと考えられる。土師器（第13図８～17）はすべてが内面黒色土器である。技法的には、ロクロで粘土塊をひきあげた後、底部を糸切し、内面をヘラミガキして、底部付近の体部をヘラケズリ整形するものが多くみられる。口縁部の外反は碗形に近くなるほど著しくなるものと思われる。なお、付高台を有するものもある。須恵器（第13図３～７）はP_2号土壙出土のものと非常に類似している。つまり、ロクロでひきあげて糸切した後、

底部につながる体部をヘラケズリしている。P_2号土壙のものと異なる点は静止ヘラケズリを施している点である。この技法は前述の土師の内黒坏と相通ずる技法と考えられ、注目しておく必要があろう。なお、第13図７の須恵器のみはヘラケズリの技法がみられない。そのかわり底部に刻書と思



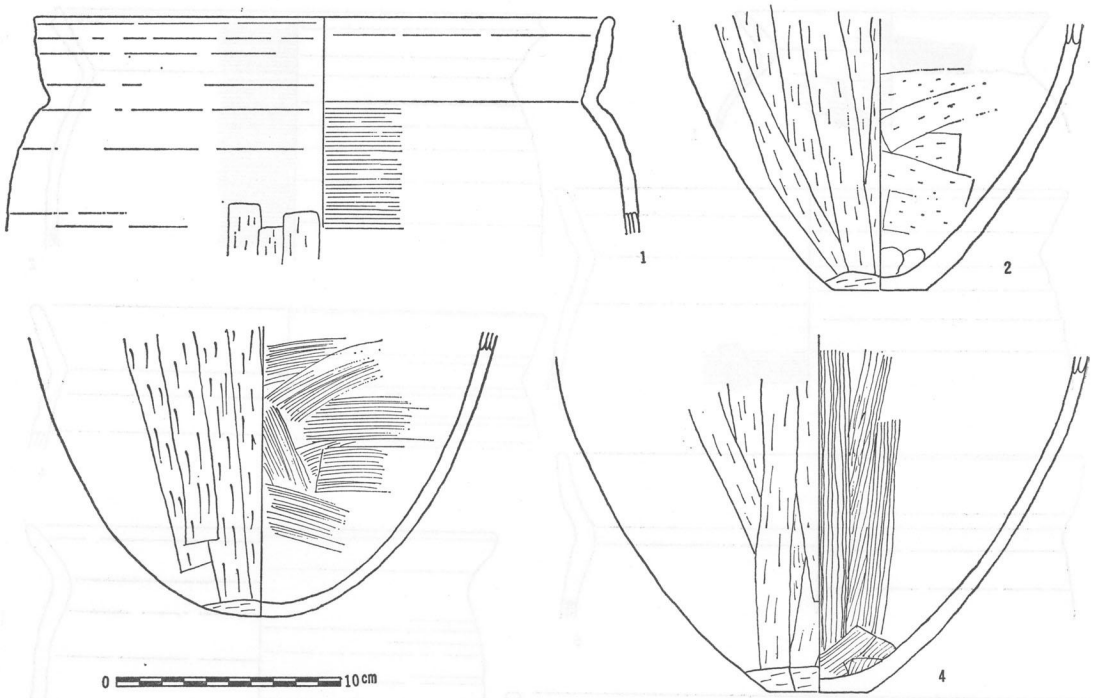
第13図　住居址出土遺物実測図(その1)（1.2灰釉陶器，3～7須恵器，8～21土師器）



第14図　住居址出土遺物実測図（その２）（土師器）

われるものがみられる。坏形土器のうち、ロクロの回転方向がしれるものはすべて右回転である。

甕形土器は小型甕（第14図１）とそれ以外の甕（第13図２～10、第14図１～４）に分けられる。本住居址出土の小型甕は１点であるが、検討の余地があるため、ここでは説明を保留にしておきたい。



第15図　住居址出土遺物実測図（その３）（土師器）

それ以外の甕についてみると、長胴形の甕であり、小さな底部をもつものと、丸底のものとに分けられる。技法的には輪づみの後、口縁部から体部上位にかけてロクロ整形を施す°外面には顕著な水引き痕がみられる。体部中位から底部にかけては、外面は強いヘラケズリを施し、内面はササラ状工具による押し引きの整形を施している。

鉢形土器のうち第13図20・21の土器は、口縁部がみられない点を除いては甕形土器に類似している。第13図22の土器はスリ鉢状の形をとると考えられ、外面はササラ状工具のカキ目を有し、内面はヘラナデを施す。

なお、遺物はカマド付近の床面及びカマド内に比較的集中している。

土器以外の遺物としては、径20㎝、厚さ７㎝ほどの表面に擦痕のある石が出土している。

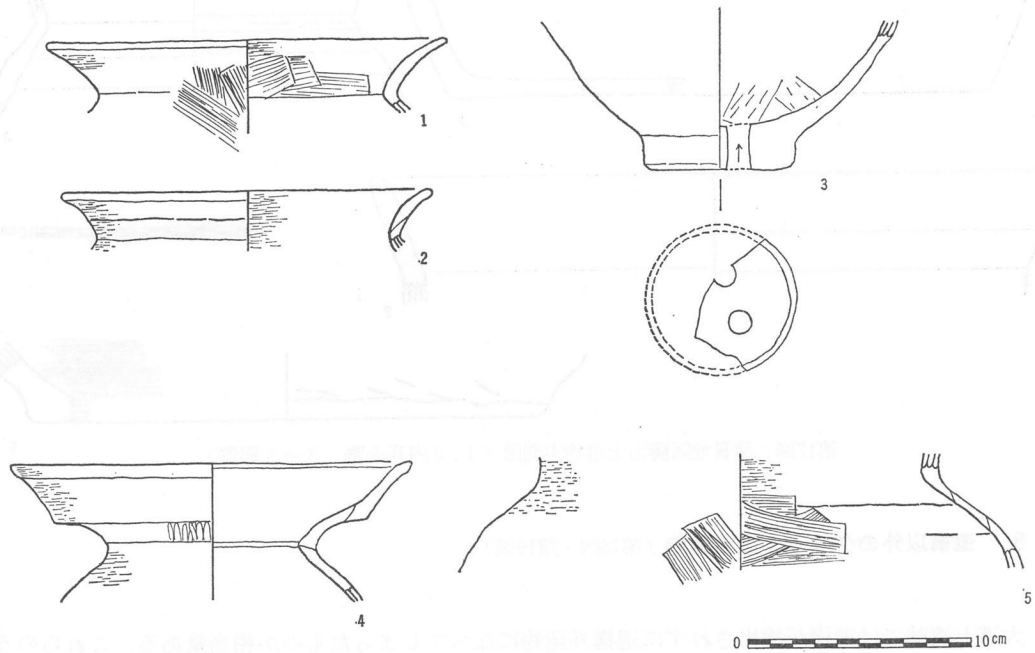
本住居址の時期は平安時代に相当する。

5.　集石址出土遺物（第16図１～３）

本遺構からは甕形土器の口縁部（１・２）と形土器の底部（３）が石の上面より出土している。甕形土器は前述の第Ⅰ地区溝の遺物と類似している。甑形土器は底部が３孔ほどありそうで、整形した後、土がまだ軟かいうちに棒状の工具で外側から穴を穿っている。時期は古墳時代前期から中期頃と推定される。

6. 石組遺構出土遺物（第16図４・５）

遺物は石組の上面から出土している。壺形土器（４）は口縁部のみが正位で石の間に置かれた状態で出土している。いわゆる二重口縁を有する。５の土師器は頸部をヨコナデし、体部はササラ状工具による押し引きを施す。時期は古墳時代前期から中期頃と推定される。

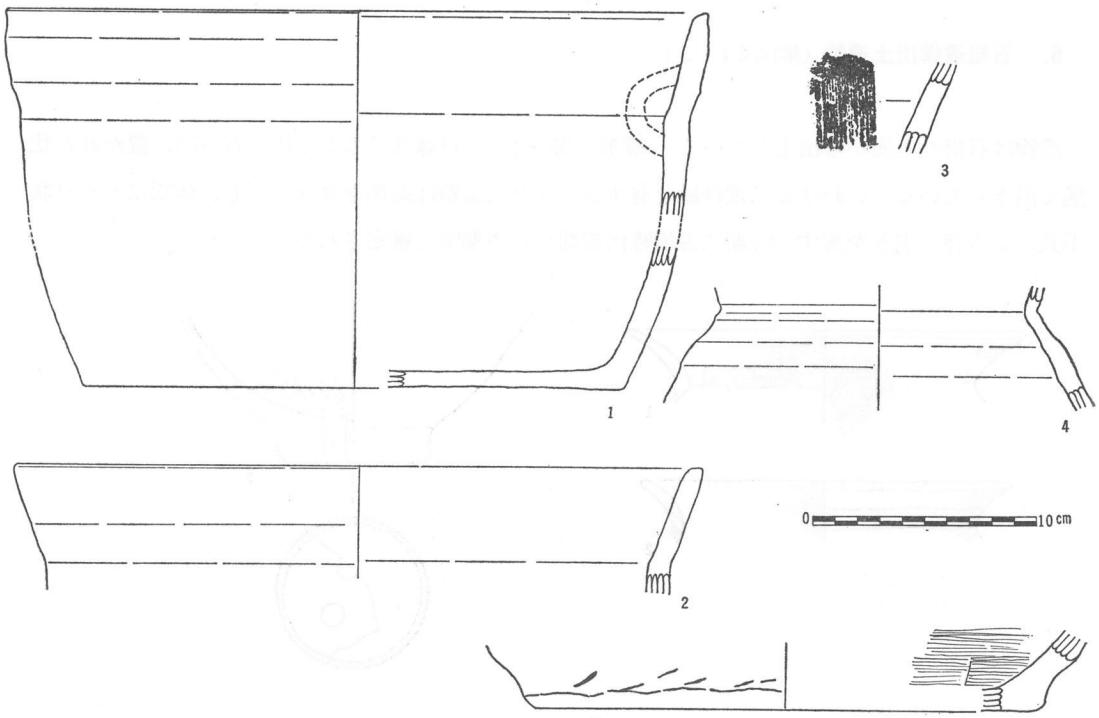


第16図　集石址及び石組遺構出土遺物実測図（１～３集石址　４．５石組遺構出土師器）

7. 第Ⅲ地区溝出土遺物（17図）

内耳土器（１・２）と若干の陶器片（３～５）が出土している。大部分は溝の中層からの出土である。硫化鉄を含んだ砂の中より出土しており、遺物は表に硫化鉄の色をおびている。

３はスリ鉢の破片と推定される。いわゆる珠洲焼の系統に属すものかもしれない。４は壺形と思われ、常滑焼的な鉄釉がかかっている。時期は内耳土器とともに中世に相当させられよう。



第17図　第Ⅲ地区溝出土遺物実測図（１．２内耳土器　３～５陶器）

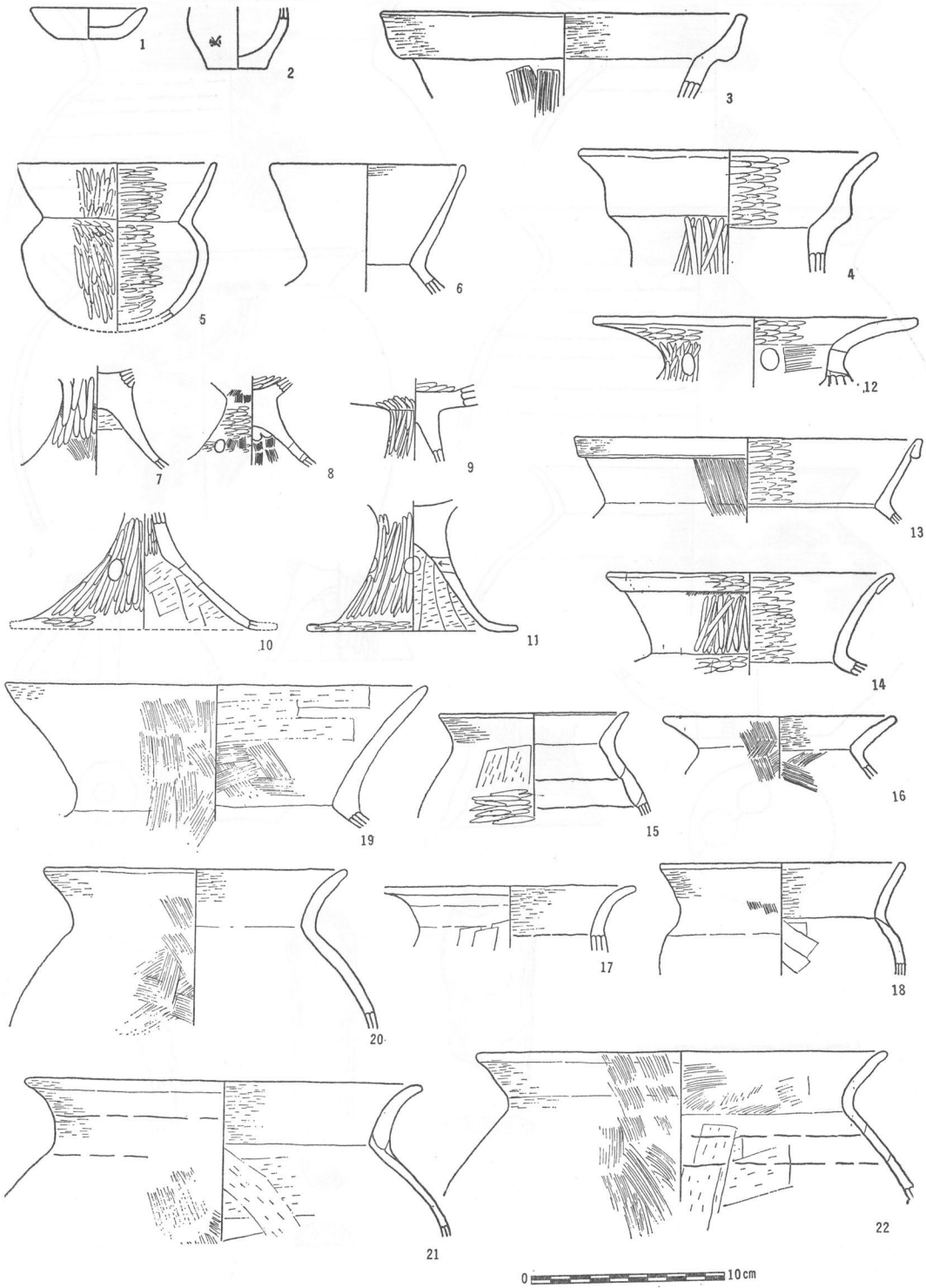
8.　遺構以外のグリット出土遺物（第18図・第19図）

大道上遺跡では遺構が検出されずに遺構外遺物になってしまったものが相当量ある。これらのうち、第18図１の土器は通常かわらけとよばれているもので、中世に比定されるであろう。同図２の土器は手捏土器で、体部に刻書様のものが施されている。平安時代に相当させて考えられる。

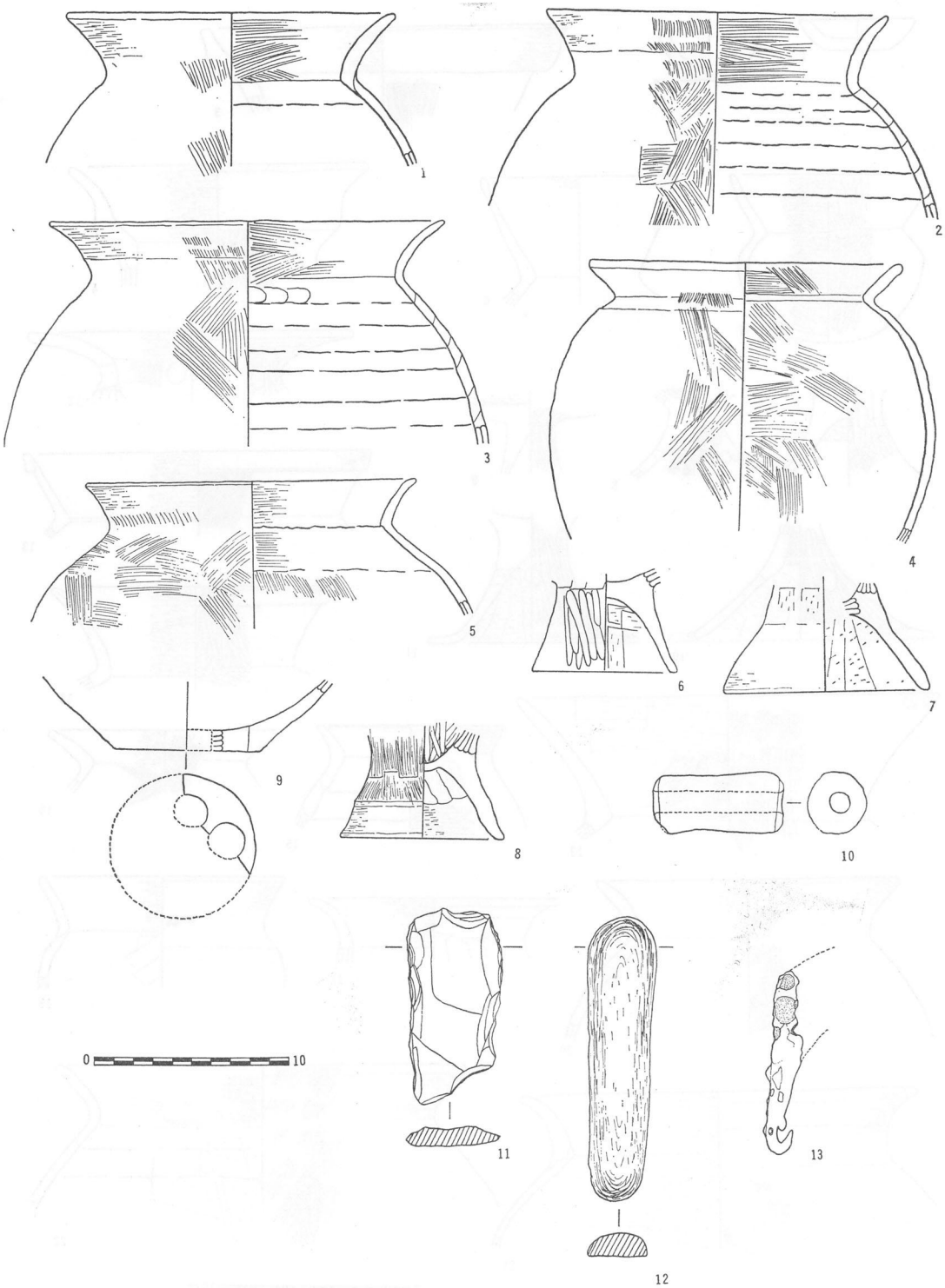
これ以外の遺構外出土の土師器は、そのほとんどが古墳時代前期から中期頃のものと推定されるが、セットで把握できないため、図示及び図表を参照していただくとして、説明は保留しておきたい。

土師器以外の出土遺物として、土錘（第19図10）、打石斧（同図11）、スリ石（同図12）、なぎ鎌（同図13）が出土している。打石斧やスリ石は縄文時代のもので、本遺跡では単独出土である。なぎ鎌は柄先の部分で、鉄さびが著しい。中世頃のものであろうか。土師器に伴なう時期の土錘は大形で、作りは良好である。一点のみであるが、扇端や千曲川から離れた所にある本遺跡で発見されたことは、当時の生活様式の一端をうかがわせている。

以上、大道上遺跡出土の遺物について述べてきたが、この遺跡では古墳時代前期～中期、平安時代、中世の３時期にまたがっていることがわかる。このうち、古墳時代前期～中期としてきた土器は、一般に古式土師器とよばれているもので、関東の土師器編年に比定するならば、五領式に最も近いものである。



第18図　遺構以外のグリット出土遺物実測図（その１）（土師器）



第19図　遺構以外のグリット出土遺物実測図（その２）
（1〜9 土師器・10 土錘・11.12 石器・13 鎌）

土壙出土土器（第11図）

番号	器形	法量（cm）			形態上の特徴	手法上の特徴	胎土	焼成	色調	備考
		器高	口径	底径						
11—1	坏	4.0	13.3	7.0	口縁部やや外反	ロクロ右回転整形 体部下回転ヘラケズリ　底部回転糸切	砂粒含 粗	脆	内外共青灰白色	P_2土壙中層より出土 須恵器
11—2	甕		13.1		口縁部外反	口縁部外ヨコナデ内ハケ目	小石粒含	堅	内外共暗黄灰色	P_1土壙出土 土師器 炭化物付着
11—3	甕			7.4		体部下外ヨコヘラケズリ内ヘラヨコナデ底部ヘラケズリ	小石粒多含	堅	内外共橙褐色	P_1土壙出土 土師器
11—4	甕		12.2		口縁部外方向へ直立最大径は体部中位？	外ササラ状工具による整形	小石粒含 粗	やや脆	内外共明橙褐色	P_1土壙出土 土師器
11—5	台付皿	2.7	13.3	6.5	口縁部外反 体部やや内彎	外ロクロ整形、内口縁ヨコヘラミガキ、体部ナナメヘラミガキ付高台　内面黒色	良	堅	内黒色 外橙褐色	P_1土壙出土 土師器

第Ⅰ地区溝出土土器（12図）

12—1	甕		18.6		口縁部やや外反 最大径は体部中位？	口縁部外ヨコナデ内ササラ状工具による整形体部 外ササラ状工具内ヘラナデ	砂粒含	やや脆	内外共 淡橙褐色	
12—2	壺		19.2		二重口縁 口縁部やや内彎	外ササラ状工具のたて整形 後ヨコナデ 内上段ヨコナデ 下段ササラ状工具	小石粒含	堅	内外共 淡黄灰色	口縁部のみ
12—3	甕		17.1		口縁部直線に立上り外反	口縁部内外共上部ヨコナデ下部ササラ状工具整形	小石粒含	堅	内外共 褐色	口縁部のみ
12—4	坩	5.8	11.2	3.9	口縁部やや外反 体部内彎	口縁部外ヨコナデ内ヨコヘラミガキ 体部外ヨコヘラミガキ内ヘラナデ	小石粒少 砂粒多含	やや脆	内外共 橙褐色	鉢形？
12—5	壙			10.8		脚部下部外ヨコナデその他内外共ササラ状工具による整形	小石粒含	堅	内外共 褐色	脚部のみ
12—6	甕			10.2	器断面厚い	脚部下部外ヨコナデその他内外共ササラ状工具による整形頸部ヘラヨコナデ	砂粒含	やや脆	内外共 淡橙褐色	脚部のみ
12—7	甕			6.0	内彎しながら立上る	外上ヘラミガキ下ヘラケズリ内ヘラヨコナデ底部ヘラケズリ	砂粒含	やや脆	内外共 橙褐色	底部のみ

12—8	甕			5.9	内彎しながら立上る	内ヘラミガキ　外ササラ状工具の押引	小石粒含	堅	内外共橙褐色	底部のみ
12—9	甑			5.0	一孔やや直線的に外方へ立上る器断面厚い	内ヘラミガキ外下部ヘラケズリ、上部ササラ状工具の整形	良	堅	内外共褐色	底部のみ

住居址出土土器（第13図、第14図、第15図）

13—1	坏台付？		14.2		口縁外反	ロクロ整形　内灰釉外釉剥落か	良	堅	外暗灰色内灰釉	灰釉陶器
13—2	台付坏			6.8		ロクロ整形　底部回転糸切後高台がつく	良	堅	内外共明灰色	灰釉陶器ロクロ右回転
13—3	坏	3.7	12.8	6.8	口縁やや外反	ロクロ整形　体部下静止ヘラケズリ　底部回転糸切	砂粒含	脆	黄灰色	須恵器ロクロ右回転
13—4	坏	4.2	12.2	5.2	口縁やや外反	ロクロ整形　体部下静止ヘラケズリ　底部回転糸切	砂粒含	脆	淡青灰色	須恵器ロクロ右回転
13—5	坏	3.9	12.8	5.8	口縁やや外反	ロクロ整形　体部下静止ヘラケズリ　底部回転糸切	砂粒含	脆	淡青灰色	須恵器ロクロ右回転
13—6	坏	(4.0)	12.0	(5.0)	口縁やや外反	ロクロ整形　体部下ヘラケズリ	砂粒含	脆	黄灰色	須恵器
13—7	坏	4.1	12.4	5.4	口縁やや外反	ロクロ整形　底部回転糸切	砂粒含	脆	灰白色淡橙褐色	須恵器ロクロ右回転底部刻書有
13—8	坏	3.8	12.2	5.0	口縁やや外反器断面厚い	ロクロ整形後　内ヨコミガキ　体部下静止ヘラケズリ　底部回転糸切ヘラナデ	砂粒含	堅	内　黒色外　褐色	土師器
13—9	坏	4.5	13.3	5.4	口縁外反	ロクロ整形後内ヨコミガキ体部下静止ヘラケズリ底部回転糸切ヘラナデ	砂粒含	脆	内　黒色外褐止色	土師器
13—10	坏	4.5	12.8	5.2	口縁外反	ロクロ整形後　内ヨコミガキ　体部下静止ヘラケズリ	砂粒含	やや脆	内　黒色外暗橙褐色	土師器
13—11	坏	4.6	13.8	5.8	口縁やや外反	ロクロ整形　後内ヨコミガキ　底部回転糸切ヘラナデ	良	堅	内黒色外橙褐色	土師器

13—12	坏		12.6		口縁外反	ロクロ整形後内ヨコミガキ	良	堅	内黒色 外暗褐色	土師器
13—13	坏		11.8		口縁やや外反	ロクロ整形後内ヨコミガキ	砂粒含	やや脆	内黒色 外橙褐色	土師器
13—14	坏		17.2		口縁外反	ロクロ整形後内ヨコミガキ	良	堅	内黒色 外橙褐色	土師器 碗形に近い
13—15	坏		17.0		口縁外反	急ロクロ整形後内ヨコミガキ	小石粒含	堅	内黒色 外橙黄灰色	土師器 碗形か
13—16	坏		14.8		口縁やや外反器断面薄い	ロクロ整形後内ヨコミガキ	良	堅	内黒色 外暗褐色	土師器
13—17	台付坏			8.2		付高台　ロクロ整形後内ヨコミガキ	良	堅	内黒色 外橙褐色	土師器 碗形につく高台か
13—18	(台付)皿		12.4			ロクロ整形後内外共ヘラヨコミガキ	良	堅	内外共 淡橙褐色	土師器
13—19	壺?		22.8		口唇部外そぎ 口縁外反	輪積後ロクロ整形内口縁下ヘラヨコナデ	良	堅	内外共 橙褐色	土師器 口唇部に「8」字の痕
13—20	鉢		24.6		口唇部偏平直立	輪積後ロクロ整形内ロクロ回転によるササラ状工具の押引	砂粒含	堅	内黄褐色 外橙褐色	土師器
13—21	鉢		21.8		口唇部偏平 長胴型か?	輪積後体部上ロクロ整形内ササラ状工具のヨコ押引	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	土師器
13—22	鉢		21.4		口唇部やや内彎	内ヘラヨコナデ外ササラ状工具のタテ押引	砂粒含	堅	内外共 淡橙褐色	土師器
14—1	甕		14.2		口縁外反、体部に比較し器壁厚い最大径は体部中位?	口縁部内外ともヨコナデ頸部外ササラ状工具整形体部内ヘラヨコナデ	砂粒含	堅	内黄褐色 外橙褐色	土師器 小形甕 流れこみの土器か
14—2	甕		22.2		口唇部外そぎ 長胴形	外輪積後ロクロ整形内ササラ状工具によるロクロヨコナデ	砂粒含	堅	内黄褐色 外橙褐色	土師器
14—3	甕		23.2		口縁部やや外反	内外とも口縁部から体部上までロクロ整形体部中位外ヘラケズリ内ササラ状工具整形	砂粒含	堅	内外とも 橙褐色	土師器
14—4	甕		23.2			内外ともロクロ整形	砂粒含	堅	内橙褐色 外黄褐色	土師器

14—5	甕		23.8		口縁やや内彎 頸部屈曲	内外ともロクロ整形	砂粒含	やや脆	内外共 淡赤褐色	土師器
14—6	甕		21.2		口縁部やや外反	口縁部から体部上位 内外ともロクロ整形 体部中位外面ヘラケズリ	砂粒含	堅	内外共 暗褐色	土師器
14—7	甕		24.1		口縁部やや内彎 頸部屈曲	内外ともロクロ整形	砂粒含	やや脆	内外共 茶褐色	土師器
14—8	甕		26.2		口縁部やや内彎 口唇部偏平 頸部屈曲	口縁部から体部上位 内外ともロクロ整形 体部中位内面ササラ状工具外ヘラケズリ	良	堅	内外共 橙褐色	土師器
14—9	甕		23.0		口唇部丸みをもつ 口縁部やや外反 体部器壁薄い	口縁部から体部上位 内外ともロクロ整形 体 部中位外ヘラケズリ	砂粒含	やや脆	内外共 淡橙褐色	土師器
14—10	甕		24.2		口縁部やや浅い	内外とも口縁部から体部上位までロクロ整形体部中位外ケラケズリ	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	土師器
15—1	甕		26.1		口縁部直立気味頸部屈曲	口縁から体部上位ロクロ整形体部中位内ササラ状工具整形外ヘラケズリ	砂粒含	堅	内外共 淡橙褐色	土師器
15—2	甕			4.2	長胴形	内ヘラヨコナデ外ヘラケズリ底ヘラケズリ	砂粒含	堅	内褐色 外黄褐色	土師器
15—3	甕			5.4	長胴形 底部丸底	内ササラ状工具ナデ 外ヘラケズリ 底ヘラケズリ	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	土師器
15—4	甕			4.4	長胴形	内ササラ状工具整形 外底ヘラケズリ	砂粒含	堅	内橙褐色 外暗褐色	土師器 スス付着

集石址出土土器（第16図）

16—1	甕		18.0		口縁部外反	ササラ状工具による整形の後　口唇部付近ヨコナデ	良	堅	内外共 暗橙褐色	土師器
16—2	甕		16.6		口縁部外反	ヨコナデ	良	堅	内外共 暗褐色	土師器
16—3	甑			6.8		内面ヘラナデ	砂粒含	堅	内外共 褐色	土師器 底部は3孔か？

石組遺構出土土器（第16図）

16—4	壺		18.1		口唇部外そぎ 二重口縁	口縁部ヨコナデ 頸部ヘラミガキ	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	土師器
16—5	甕					頸部ヨコナデ 体部ササラ状工具整形	小石粒含	堅	内黒褐色 外褐色	土師器

第Ⅲ地区溝出土土器（第17図）

17—1	内耳	(17.0)	31.6	24.4		粘土ひも巻上後ロクロ整形	砂粒含	堅	内外共 暗橙褐色	土師質
17—2	内耳		31.0		口唇部偏平	ロクロ整形 はけ目有	砂粒含	堅	内外共 淡橙褐色	土師質
17—3	スリ鉢						砂粒含	堅	内外共 茶褐色	陶器 破片のみ
17—4	壺					ロクロ整形	良	堅	茶褐色	陶器 鉄釉かかる
17—5	甕		22.8			内ササラ状工具のヨコナデ整形	良	堅	暗青灰色	須恵質

遺構以外のグリット出土土器（第18図・第19図）

18—1	皿	1.6	6.0	3.2	器壁厚い	ロクロ整形 回転糸切	良	脆	内外共 明褐色	土師質
18—2	手捏土器			3.2			小石粒含	堅	内外共 暗褐色	土師器
18—3	壺		19.0		二重口縁	口縁部内外共ヨコナデ体部上　ササラ状工具整形	小石粒含	やや脆	内外共 橙褐色	土師器
18—4	壺		15.5		二重口縁	口縁外ヨコナデ その他ヘラミガキ	良	やや脆	内外共 黄灰褐色	土師器
18—5	坩	(8.8)	10.2	(3.0)	口縁やや内彎 体部上肩つくる	内外共ヘラミガキ	良	堅	内外共 暗褐色	土師器
18—6	坩				口縁やや内彎 口縁部大	口唇部ヨコナデ	良	堅	内外共 黄褐色	土師器
18—7	高坏					脚部外上ヘラミガキ 下ササラ状工具 内上ヘラケズリ	良	堅	内外共 橙褐色	土師器

18—8	高坏					脚部外上ヘラミガキ下及び内ササラ状工具整形	良	堅	内外共橙褐色	土師器
18—9	高坏					ヘラミガキ	小石粒含	堅	内外共淡橙褐色	土師器
18—10	高坏			(13.8)		脚部外ヘラミガキ内上ヘラミガキ内下ヘラナデ	良	堅	内外共淡橙褐色	土師器
18—11	高坏			11.9		脚部外ヘラミガキ内ヘラケズリ	砂粒含	堅	内外共暗褐色	土師器
18—12	甕？					内面口縁下ヘラナデその他ヘラミガキ	良	堅	内外共淡赤褐色	土師器
18—13	甕		18.2		折かえし口縁	口縁折かえし部外ヨコナデ下ササラ状工具整形内ヨコヘラミガキ	小石粒含	堅	内褐色外黒褐色	土師器
18—14	甕		14.8		折かえし口縁	内外共ヘラミガキ	砂粒含	堅	内外共淡橙褐色	土師器
18—15	甕		9.8		器壁厚い	口縁内外共ヨコナデ頸部外ヘラナデ体部外ヘラミガキ	良	堅	内外共暗褐色	土師器
18—16	甕		13.2		頸部屈曲強し	口縁内ヨコナデその他ササラ状工具整形	小石粒含	堅	内外共暗褐色	土師器
18—17	甕		13.1		口縁外反	口縁内外共ヨコナデ頸部外ヘラナデ	小石粒含	堅	内外共暗褐色	土師器
18—18	甕		12.6		口縁やや外反肩部弱い陵線	口縁内外共ヨコナデ頸部ササラ状工具圧痕　体部内ヘラ押引	良	堅	内外共黄褐色	土師器
18—19	甕		21.8		口縁大	口唇部内ヘラナデ外ヨコナデその他ササラ状工具整形	小石粒少含	堅	内外共淡橙褐色	土師器
18—20	甕		15.8		最大径体部中位口縁部外反	口縁内外共ヨコナデ体部外ササラ状工具整形	小石粒含	脆	内黒色外淡黄褐色	土師器
18—21	甕		20.6		口縁立上り気味に外反	口縁部内外共ヨコナデ　体部外ササラ状工具内ヘラナデ	砂粒含	堅	内外共暗褐色	土師器
18—22	甕		21.4		口縁部やや外反	体部内ヘラナデその他ササラ状工具整形	砂粒少含	堅	内外共黄褐色	土師器
19—1	甕		17.0		口縁やや外反	口縁内外共ヨコナデ体部外ササラ状工具整形	砂粒含	脆	内暗褐色外橙褐色	土師器

19－2	甕		17.8		口縁やや外反	口縁内外共　ササラ状工具整形後　外のみヨコナデ　体部外ササラ状　工具整形	小石粒少含	堅	内外共 暗橙褐色	土師器
19－3	甕		20.5		口縁外反 最大径体部中位	口縁外ヨコナデ内ササラ状工具整形体部外ササラ状工具整形	砂粒含	堅	内外共 橙褐色	土師器
19－4	甕		16.4		肩部陵線有 最大経体部中位	口縁ヨコナデ 体部ササラ状工具整形	砂粒含	堅	内外共 暗褐色	土師器
19－5	甕		17.1		口縁外反	口縁内外共ヨコナデ 体部内外共ササラ状工具整形	砂粒含	堅	内外共 褐色	土師器
19－6	甕 脚部		7.4			脚部 外ヘラミガキ 内ヘラナデ	良	堅	内外共 淡橙褐色	土師器
19－7	甕 脚部		10.8		脚部下位ふくらむ	脚部 外上ヘラナデ下ヨコナデ　内ヘラナデ	良	やや脆	内暗褐色 外橙褐色	土師器
19－8	甕 脚部		8.4		脚部中位陵線	脚部下ヨコナデ上外面ササラ状工具整形 内面ヘラナデ	良	堅	内外共 暗褐色	土師器
19－9	甑			7.4		体部外及び底部ヘラケズリ　内ヘラナデ	砂粒含	堅	内外共 黄灰褐色	土師器

V 結　　語

大道上遺跡の発掘調査は実に悪条件が重なってしまい、関係者に迷惑をかけてしまったことをまずおわびしておきたい。しかし、この調査が変則的な日程と不備な調査員体制のもとで行なわれたにもかかわらず、一応の成果を収めることができたのは幸いとすべきであろう。調査結果については各項にわたって述べてきたとうりであるが、ここでもう一度、今回の調査で把握された点をまとめて、考察を加えておきたいと思う。

まず、大道上遺跡の位置であるが、小布施扇状地の古代遺跡では最南端にあたると考えてよいであろう。扇央に近い遺跡であり、扇端との立地条件も当然異なっていたと思われる。この違いからくる生活場面の展開はどうであったか、今後に残された課題といえる。

大道上遺跡の立地についてみると、松川の乱流路の近くにあったとみてよいであろう。そして、ここに営なまれた遺構として、4～5世紀頃の第Ⅰ地区溝・集石址・石組遺構があり、平安期に至って土壙・住居址が確認される。中世の遺跡分布については不明であるが、第Ⅲ地区溝も検出されており、問題を提起している。

次に、これら遺構の個々について多少意見を述べておきたい。

(1) 土壙　　P_1の土壙に付随するP_2土壙のような例は、小布施町中子塚境遺跡においても確認されている。方形のP_1と同じくらいの土壙に近接して、やはりピット状土壙があり、そのピット内には多量の木炭がつまっている。出土土器はやはり坏である。木炭とともに坏が伴出する点、単に火をたいた跡でなく、土壙における何かある種の火炊を伴なう儀礼が行なわれたと考えるのである。

(2) 第Ⅰ地区溝　　溝の機能からして何らかの関係を有す遺構が近くに存在していたであろうことは推測される。しかし、溝内に投げすてられたような状態になっていた多量の土器片については、やはり当時の祭祀的な行為の跡と考えられるのではなかろうか。溝と祭祀行為は結びつきやすい要素をもっていると思われる。

(3) 住居址　　まず位置からすれば、第Ⅱ地区の東南端に接し、拡張したくらいであるが、住居址が他にみあたらないとすれば、小布施の古代住居の立地範囲も、せいぜいこの辺が限界で、おそらくここかな、東側の湧水に悪まれた雁田山麓へむけて住居群はのびているように思われる。次に、この住居の内部構造についてであるが、一竪穴内に石が持込まれている例は応々に他にもしてある。しかし、かまどのまわりに石をならべ、柱をたてて特別の区画をした例はあまりないであろう。それが厨房施設であったかどうか判断しがたいが、注目すべき遺構である。

(4) 集石址　　性格は把握しがたいが、所在する位置がかっての乱流路に沿っていることや、炭が混在している点、あるいは礫と共に土師器片が多出していることなどから、廃棄場的な性格をもっていたのであろうか。ピットは柱穴であったのか、単なるピットなのか、理解に苦しむ。第Ⅲ地区の石組遺構もそうであるが、この時期における石を使った遺構例として特記した。

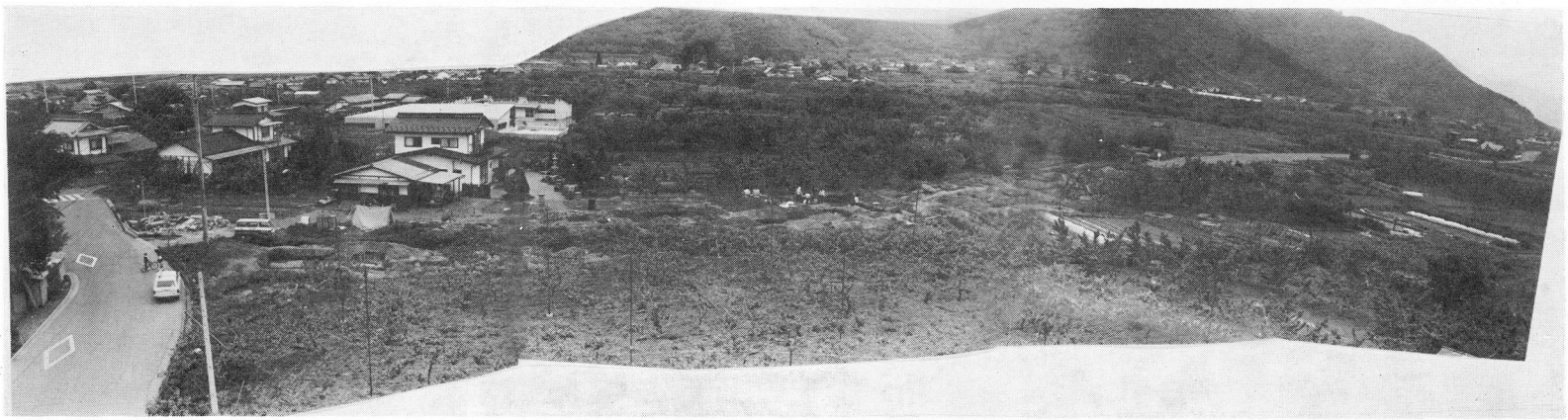
(5) 第Ⅲ地区溝　あまりにも中世という時代が考古学的に究明されていない現在、このような溝が存在していたということだけ記録しておきたい。ただ、これとは全く異なるが、小県郡東部町田中三分南遺跡発見の「ガニ水道」のような遺構もあり、この溝も中世における農業用水路施設の一部と考えられないでもない。

(6) 石組遺構　集石址とやや異なる点が指適できるが、このような石組を築く意図がどこにあったものか明確でない。この時代に石を用いて遺構を築くものといえば、この地方にも多くみかける積石塚である。積石塚古墳と何が通ずる意図が介在していたのではなかろうか。

出土遺物では土師器が主であったが、セットして把握されるものが少なく、本調査における最大の悩みであった。しかし、その中で、古代遺物として土錘と小型手捏土器が各一点だけであるが発見されたことを特記したい。土錘は中野市桜沢遺跡でも発見されている。この遺跡は小布施の続きにあたり、延徳後背湿地に面した山麓に立地している。千曲川とは湿地にさえぎられ、漁を行なうとすれば、延徳沖の沼地の魚を対象にしたであろう。扇央に近い大道上遺跡でも、この土錘によって漁を行なった形跡がうかがわれ、生活様式の一端を知ることができる。小型手捏土器は自然物の対象を祀る祭器に使用された祭祀遺物であるが、この遺跡においてもその形跡があったことになる。自然物の対象は何かわからないが、近くには雁田山もあり、延徳田圃の彼方には高社山が望まれる。いずれも祭祀の対象になる浅間型の山であり、考慮すべき環境と思われる。

以上、この調査報告を擱筆するにあたり、御協力いただいた関係各位に厚く感謝の意を表す次第である。特に、この報告書作製にあたって、序文をいただいた長野県須坂建設事務所長・太田勝巳氏、遺物の項を執筆していただいた郷道哲章氏、ならびに校正など編集事務を一手にひきうけて下さった金井文司氏には格別の御援助をいただいた。銘記して御礼申し上げたい。

第一図版　大道上遺跡全景



1.　大道上遺跡全景

第二図版　調査スナップ・土壙

2. 調査スナップ

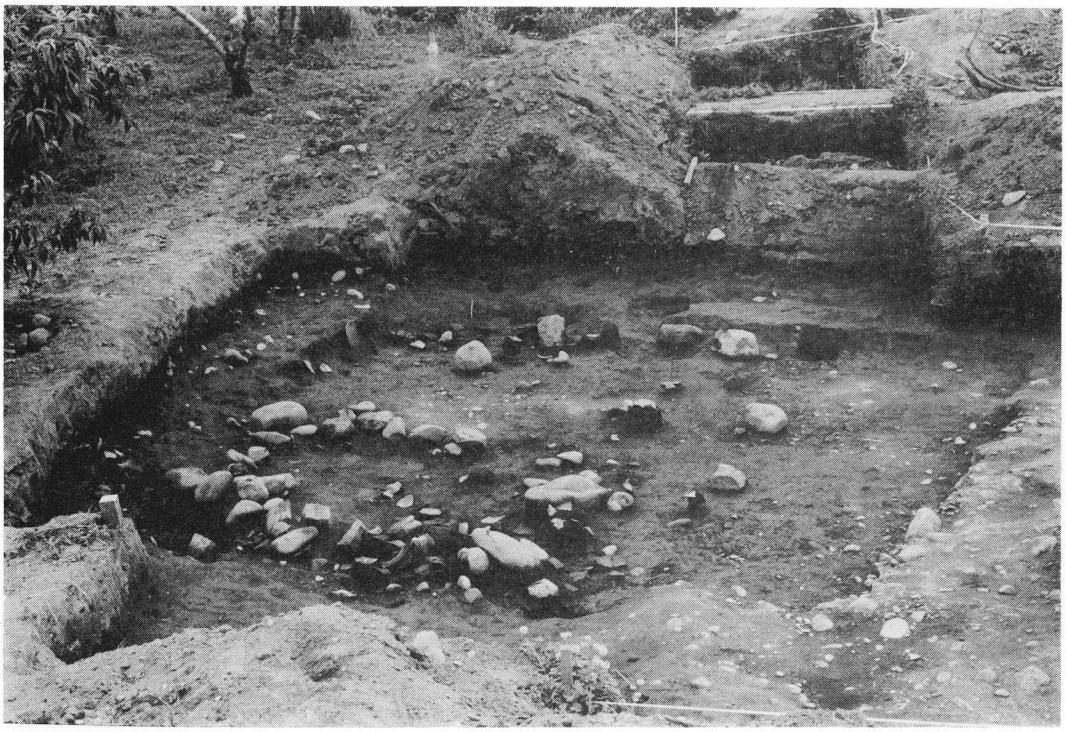
3. 土　　壙

第三図版　第１地区溝・第１地区溝内土器出土状態

4. 第 1 地 区 溝

5. 第１地区溝内土器出土状態

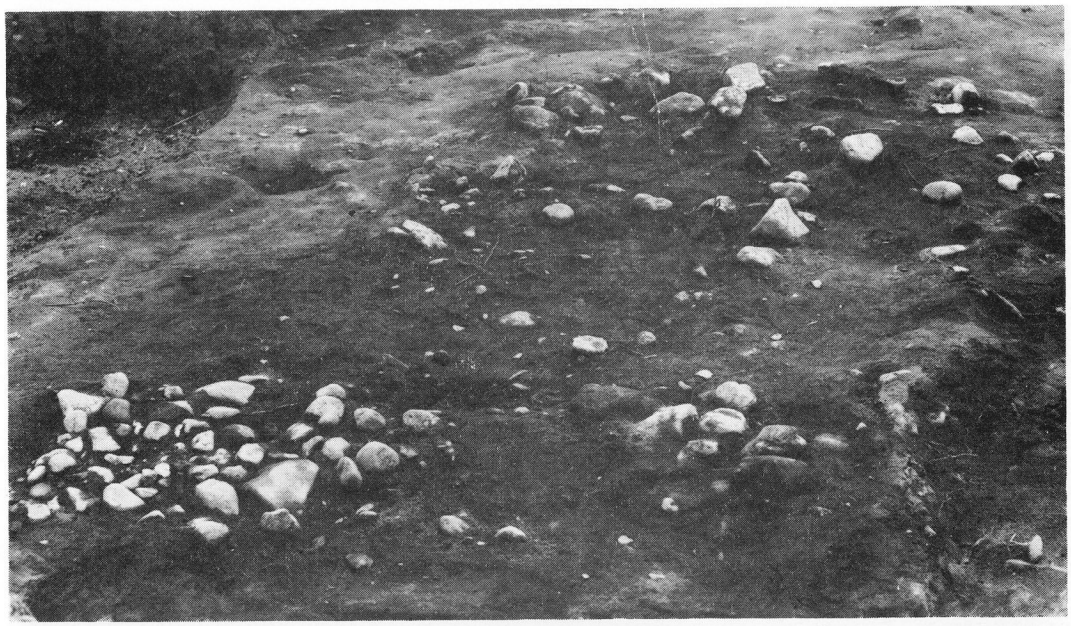
第四図版　住居址・住屈址かまど



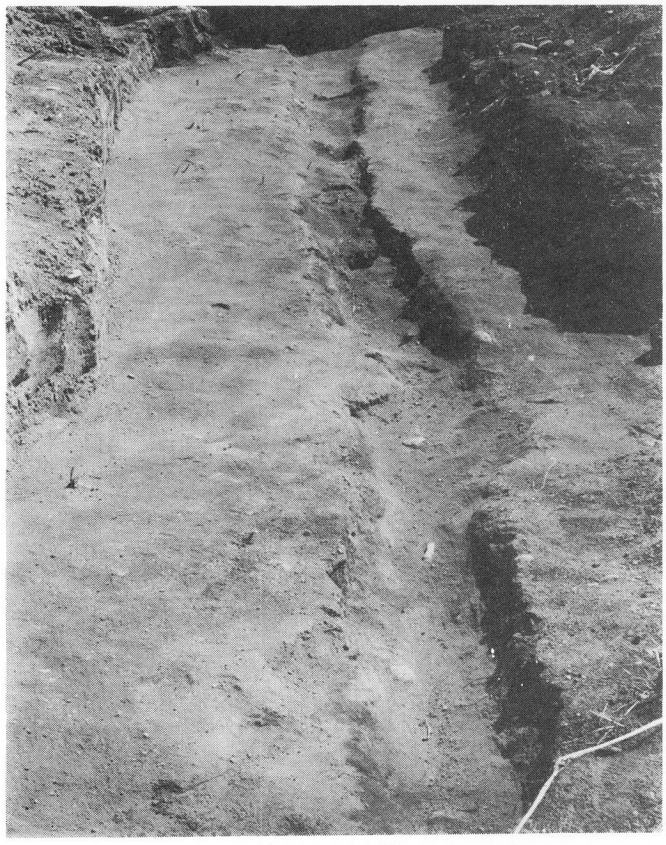
6. 住　居　址

7. 住居址かまど

第五図版　集石址・第Ⅲ地区溝

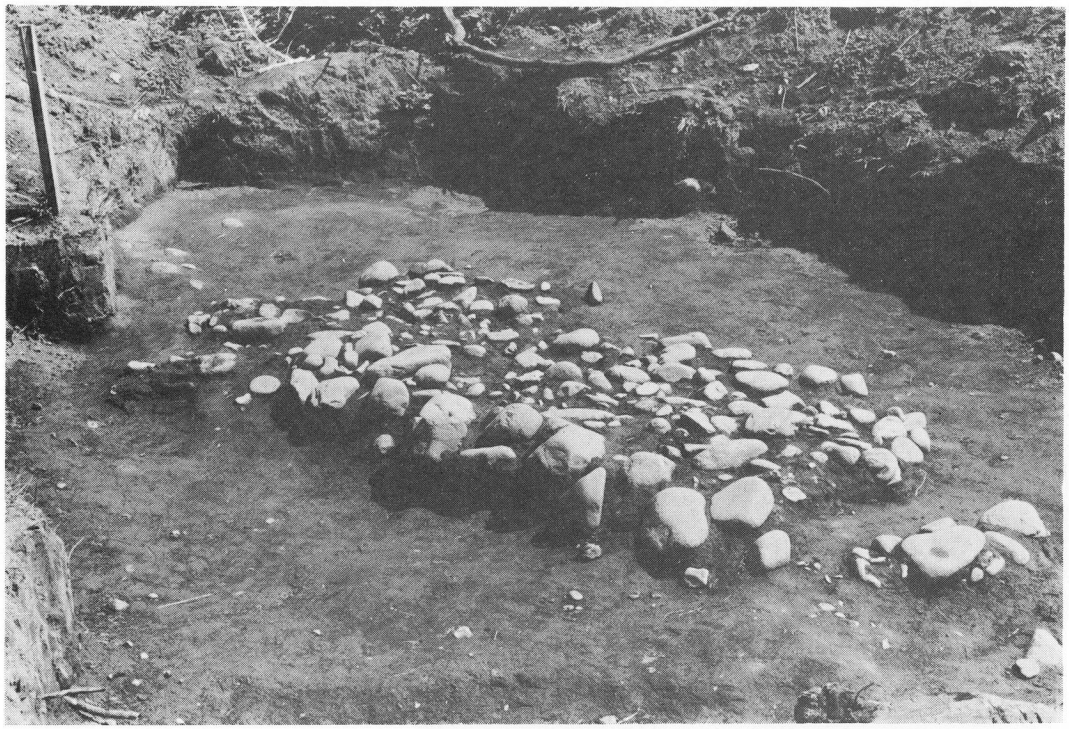


8. 集　石　址



9. 第 Ⅲ 地 区 溝

第六図版　石組遺構・石組遺構土器出土状態



10. 石　組　遺　構

11. 石組遺構土器出土状態

大道上遺跡

昭和52年３月25日　印刷
昭和52年３月31日　発行

編　集　　小布施町教育委員会事務局

発　行　　小布施町教育委員会
長野県上高井郡小布施町大字小布施 1491—2

印　刷　　小林印刷株式会社
長野県上高井郡小布施町大字小布施1512